

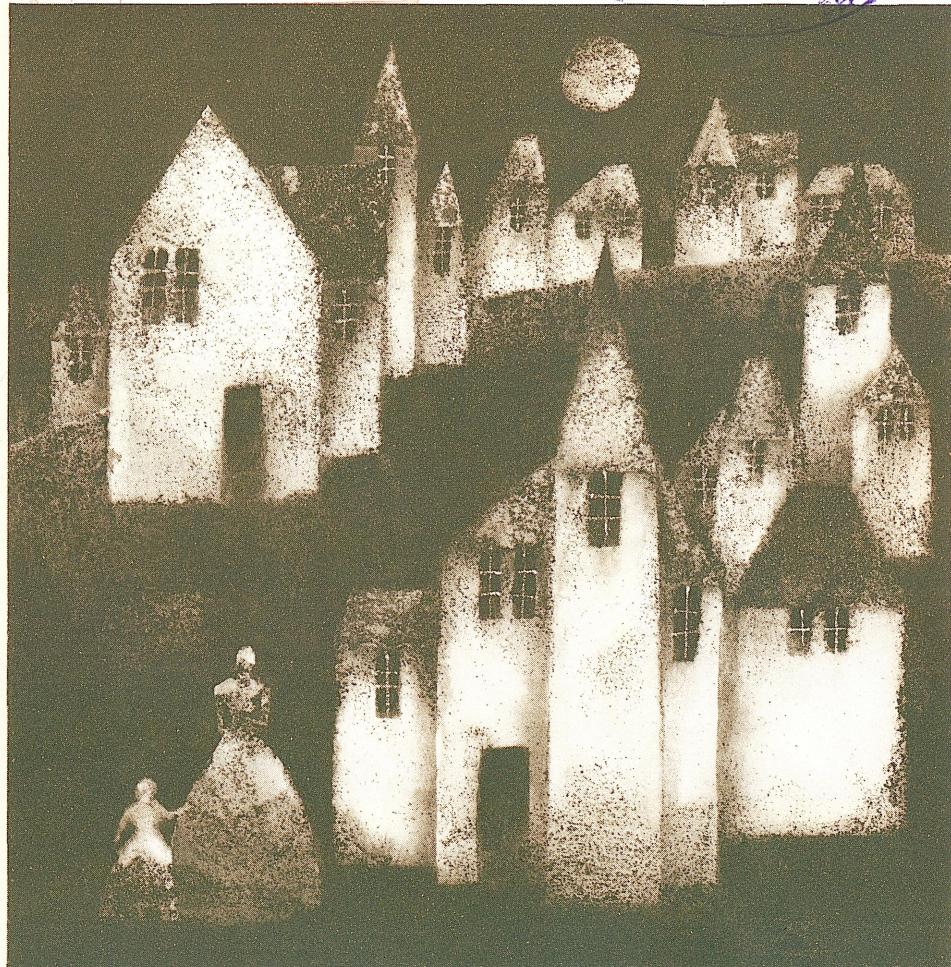
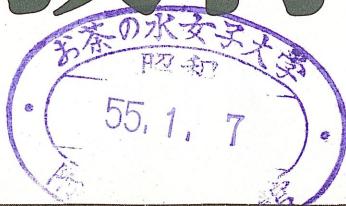
# 幼児の教育

お茶の水女子大学図書

和  
昭  
55

131624

1



# 好評発売中!!

●フレーベル館創業70年記念出版●

# これからの中保育 全6巻

大場牧夫 海 卓子 平井信義 本吉圓子 森上史朗 共著

●若い先生も、ベテランの先生も、原点に立ってもう一度“保育”を考えてみませんか。基本的な問題を考えてみませんか。あなた自身“これからの中保育”を確かなものとするために。



●平易な文章で語りかける全6巻。保育の実際例や座談会などが豊富に入っていて、読みやすさ抜群です。

A5 軽装判・各256頁  
セットケース入り

セット価格(全6巻)

9,600円

〈第一巻〉

「これからの中保育1」

「遊び」とは何だろう

〈第2巻〉

「これからの中保育2」

「自由」とは何だろう

〈第3巻〉

「これからの中保育3」

「課題」とは何だろう

〈第4巻〉

「これからの中保育4」

「生活」とは何だろう

〈第5巻〉

「これからの中保育5」

「集団」とは何だろう

〈第6巻〉

「これからの中保育6」

「総合」とは何だろう

フレーベル館

# 幼児の教育

第七十九卷 第一号



# 幼児の教育 目 次

—第七十九卷 一月号—

© 1980  
日本幼稚園協会

表紙 駒宮録郎  
力ット 中島英子

一九八〇年 年頭の感想……………周郷 博 (4)

幼児と世界とのかかわり……………E・フェルメール (10)

ルソーの夢

—むすんでひらいて考— (その十六)……………海老沢 敏 (15)

私の幼児教育論 (1)……………小川博久 (20)

コマ・独楽・しま (28)



### ◇児童文化探訪

羽子板 ..... 皆川美恵子 (31)

思いだすこと・考えること ..... 中村妙子 (38)

### ★倉橋賞受賞論文

フレーベルの第一恩物を原点とした玩具と

乳児の発達段階とのかかわり合いの一考察 ..... 川田芳子・他 (45)

現職研究レポート その三 A幼稚園の場合 ..... 太田留美 (52)

保育の体験と思索

—子どもの世界の探究— (三十) ..... 津守真 (57)

# 一九八〇年——年頭の感

周 鄉 博

「八〇年代の選択」ということばが、七九年秋の衆院議員選挙にあたって、与野党ともに、日本の政治の進路を決める最重要な「争点」として「政治の次元」で「大いに争われた」けれど、それは、なんといっても、政治

——というよりも、直接には、「選挙」つまりは総選挙という時点で有権者の票がどれだけそれぞれその党に集まるか、ということで「喧しく」熱っぽく候補者たちが口にしたことばだったろう。

三十年にわたる「一党独裁」に似たかたちの自民党、それに社会、民社、公明……民主連合などまで、それぞれに日本の進路＝未来について何らかの青写真を描いて「争われた」わけだけれども、日本の政治——そして經濟、日々の暮らし、「生活」は、何を軸 (axis) にして、どういう方向へ向かって「進路をとる」「新しい太い芽」になるか、ということで「喧しく」熱っぽく候補者たちが主枝を伸していこう」としているのだろうか？

いま、その一九八〇年という年になつて、その「八〇

年代」が始まる年の「年頭」にめぐり合せて私たちには立っている。

「八〇年代の選択」ということばを、たんに「政治の次元の用語以上」のずつしりした重みをもったものと感じてきている者にとって、この新しい「年の始め」（「なんと忘れていた「なつかしい」ことばを私は思ひだしたことか！」）は、何か過ぎ去っていく過去と新しく来るものとの境目に立つ、回心、覚醒……老若男女を問はずに「日常的なものを超えた」感慨を深くもつていいはず——だと思うけれど、そんな心（感じる心）さえ、何やらひどく「衰え」を見せている感じがする。

私はここで、昔の年の暮れ（大晦日）から正月へ（新年への）何からきうきする（やがて新しい春がくる）時の流れを思い出しているのだが、新しい年を迎えるのに、身の回りのもの（環境）ができるだけ不潔不淨のないものに掃除したり拭き清めたりして、やがて百いくつかの「煩惱」——欲心の「穢れ」を洗い清める除夜の鐘を聞いて、その新しい年を迎えた。

ところが、戦後——とくに六〇年代から七〇年にかけて、「経済大国」を謳歌したその絶頂期の、この「年の暮れ」はデパートやバー、飲み屋が「教会にとって代わった」ような「妙なクリスマス」が大はやりの時代があつて、昔の「新年」のほうは、その「欲望、物質謳歌」の妙なクリスマスの大はやりで、影がうすくなっていた。

その六年の春に大学附属の幼稚園の園長になった私は、その年の暮れに近いあの幼稚園での「クリスマスのお祝い」と称するものに大まじめで腹を立てたことがあつた。それは今から十年もまえのことだが、当時、その幼稚園の「クリスマス」で、一人ひとりの幼稚園児に、その当時の値段で千五百円近い（今なら、四千円にもなる）「クリスマスのおくりもの（ギフト）」を与えていた。園長先生、子どもがよろこんでいるから見て……」と閔先生（いまは幼稚園をやめて幸福な家庭の母・主婦になつていて）が私を誘うのを「見たくない！ こんなクリスマスをやるべきではない！」とアタマから叱つた（憤つた）ことがある。（そのことで閔先生とは心の深いところで親しみができていたように思い出される）。

この一つの事件のあとで私は、こんな、世界のどこにもない「甘え、不淨なクリスマス」よりも——クリスマスなら、もっと救い主の誕生を祝う（いまの子どもたち

にとつてその「救い」がほんとうに必要なのだ）闇の中に光を」共に感じる、清浄なクリスマスにしたい——。「年の始め」（年の始めのためしとて……）とその昔にうたわれた）——「新年のお祝い」をやるほうが、子どもたちにも家庭の父母たちにも意味があるのでないかと「ひとりで考えていた」時期があった。日本の日常生活は、その昔の面影をとどめないとすっかり変つてしまつたといえる——この大変化のなかで、「年の暮れ」から「新年」にかけてのなん日かのあいだに、「孤島のよう」に、日本人の「心」がなおそこに素樸に生き残つている……そんなふうに私には思われたのだった。過ぎ去つていく過去と新しく来るものとの境目に立つ——昔の「年の始め」や夜のあとに来る「朝」——そういう「生れなおす——新生の目ざめ」のようなものを、私たちほどだけ実感（「生きること」の実感）をもつて感じているだろうか。

何を書くともなく、「一九八〇年——年頭の感」という題目を書いて考へているうちに、どういうわけか、その「年頭の感」が、藤村操の「嚴頭の感」というのと、いつのまにか二つが「裏と表がかすんで一つに重なつて」

感じられてきた。明治三十七年——藤村操という、当時の一高（旧制第一高等学校）の一学年三学期の学生（少年）が、その年の五月二十二日に華厳の滝に投身自殺した。（当時の旧制高校は、いまの歐米、中国のように新学年が秋に始まり、五月二十二日は三学期が始まつて少しだったところだった）藤村操が一高の秀才であったこと、「嚴頭の感」は天下の名文であること……この藤村操の自殺という事件は、ずっと後の私たちの少年時代にまで、なんでもない農家のおばさんまでが何かにつけて話題にした。それほどに長きにわたつて日本人の記憶に残つた事件だった。全文はこうである。

悠久たる哉天壤、邈々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす、ホレイショの哲学竟に何等のオーソリティを価するものぞ、万有の真相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」我この恨を懷いて煩恥終に死を決するに至る、既に嚴頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし、始めて知る、大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。

「悠々たる哉天壤、遯々たる哉古今（遼々たる哉古今）と憶てる人も多い）、五尺の小軀を以て此大をはからむとす……」につづいて「ホレーショの哲学……」といふところは今もよくその意味が分明でないが、けつきよく、万有の真相は唯だ一言にして悉す曰く「不可解」—— いってみれば、時代とその状況は現在とは大きく距つてゐるけれども、「人生不可解」という一言に尽きる。—— いうことが、この「巖頭の感」の「巖頭に立つ」に至る筋道として独特な「名文」で少年藤村操は語つてゐるようには感じとれる。

明治三十七年は、西暦でいえば一九〇四年、日露戦争が起きた年で、今世紀——二十世紀という二つの時代が始まることとなる「大きな転換の時代」だった。それから七十五年ほどたったこの一九八〇年の年——これは明らかに一つの時代が終つて、未だ見ざる「新しい時代」にいやでも応でも立ち向うことになる、そんな新しい歴史の岐水路

『門口に私たちは立つてゐる。このことは歴史学者トインビーやバラクラフがとうに「予見」していた「人類史の大大きな転換』であった。

「悠々たる哉天壤（広大な宇宙とこの天地）、遯々たる

哉古今（人間が生きてきたこの歴史という時の流れ）——その中で「五尺の小軀をもつ」た「人間」という生きものが何によつてその存在を証しするのか……」この

「少年らしい」藤村操の弾んだ「やわらかな心」の渦巻

くような世界像——人生像に、明治という時代の「若さ」がなお緑色濃く脈動しているのを感じさせる。宇宙や生

命の謎、先史研究や人類学は、それから後の七十年に及ぶ間に、藤村操の時代とは較べようもなく「進んで」いるはずだけれども、多くの人々にとって、それらはたん

に受け身の「知識」や「情報」というところに止つて、生きている一人の人間」のからだで「感性」によつてその全体がつかまれてゐる——「人間いかに生きるか？」というところで「受けとめて」いる感じは薄い。この「人生不可解」という大きな問題が八〇年代の年頭に立つ私たちに、再び大きな問題として臨んできているのだ、と私は思う。

けれど、この大きな問題はどうもまじめに問題にされそうもないのだ。つかまえようもない「不安（先行き不安）」のかたちで、いまの親たちにも、若者にも、子どもたちにもますます、「つき纏つて」いる——「下り」

か「開運」とかいう運命判断という商売がかけで大繁盛だということも聞く——進学塾の繁盛ぶりも想像以上——

「どうやら『誰か』『何か』に『すがつて』この『人生

不可解』といふ避けようもない問題を個人本位に慰める

「解決する」手をさがして、いる風潮が大勢のようで、「大

なる悲觀は大なる樂觀に一致するを」ということばに暗

示されている——この時代の「危機意識」を深くぐり

ぬけて「一つの新しい心境」に到達するという氣力には

まったく欠けているように感じられる。「不安」を慰め

る手段には事欠かない「豊かな社会」だし、そういう

「不安」を慰める商売はすぐにできてくる。

私が一九八〇年——年頭の感というこの短い文章を

「年の始め」を思い出し、夜の闇のあとの「朝の感覚」

の再生とともに、七十年まえの藤村操の「巖頭の感

かさね合せて書いてきた気持がわかつてもらえるかどうか。

ついでに書き添えておきたいが、その藤村操と同級だ

った一人の同級生が、終戦前後（昭和一五—二一年）の

一高の校長をした安部能成という人で、そのころの一高の卒業生が校長の安部能成に揮毫をせがんだ話も『向

陵』という同窓会雑誌に出ていて、書いてもらつた揮毫の一つに、

山静似太古（山静かにして太古に似たり）

日長如少年（日長くして少年の如し）

という漢詩句があつて、私は「ああ、なんという『い

いことは』にめぐり合つたものか」と藤村操の「巖頭の

感」と通じるものを持ちながら、鷹揚な「そこから何か

が生れ出でくる」ゆたかな自然像、人間（少年）像が浮

かんできた。この「日長如少年」——現在の「教育」（学

校が不當に専有している）がなんと惨めで不毛なものか

を思い知らされる思いがした。

一九八〇年——政治ばかりではない、時代が大きな転

換に向うとき、「教育」——というよりも、むしろ「人間

の問題」が、「政治」に優先する大きな問題になつてく

るのは世界の「常識」であり、政治もそうだが、「教育」

「人間の問題」は、現在の状態を「そのまま延長した」

その線の上には、もう「未来はない」ことを、誰ひとり疑うものはないだろう。

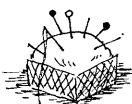
私が言おうとしたこと、それは「人生いかに生きるか」が、これから教育の中でその核心に据えられなけ

ればならない、という」とだ、といつてもよい。よく考  
えて見るがいい。「教育は永遠につづく努力であり、悪  
魔との不斷の闘争だ。そこに教育者の面白味もあるのだ  
ろう」という、遠軽の家庭学校を訪れた私の「高の後輩  
の一人のことばが、私には喧しい、「教育論議」「制度い  
びり」よりもずっと実感のあることばだったし、教育と  
いうものの実体一本体は、いま徒らに騒がれているよう  
なものである代りに、これからは（すでにそうした動き  
の中にいる）「人間の“救い”（たんなる知識、地位獲  
得の競走や個人的成功的ためではない）という側面が新  
たに大きくなつていいだろう——その側面をこれから本  
気にそだてていくべきだ、というのが最近の私の回心—  
発心でもあつた。

と同時に、女性—母の問題が、教育の中で大きな問題  
になるだろう——「女性問題」はヨーロッパ、アメリカ  
でも、ますます「大きな問題」になつてきているが、  
「聖母子像」というものに暗示されている「女性＝母」  
のからだ（と心）の清浄（大地、自然の清浄と通じる）  
——このことを抜きにして「教育が教育でありえよう」

はずはないことも、私は、これもこの夏のヨーロッパの  
旅の中でよくよく考えた。日本の女の顔——母の顔はそ  
の生活とともに余りに変り過ぎた。ヨーロッパ、アメリ  
カ、中国にも、「朝」がまだあった（日本は夜——欲望  
の渦巻く経済大国か）し、「友情」も「人生の悲しみ」  
も、「求めるもの」をもつた顔と私はいつしょに語る「救  
い」に、まだめぐり合うことができた。

私は、ひどく回り道をしながら、「教育のこと」をこ  
の八〇年代の年頭にあたつて語ってきたつもりである。  
三歳の子どもが二十三歳という若者になるとき——それ  
は、もう未知な二十一世紀の始めだからである。



# 幼児と世界とのかかわり

E・フェルメール

私たちは現象学的な見方に立つて幼児を観察してみよう。そうすることによって、子どもと子どもの行動についての記述を試みよう。我々の観察によれば、幼児は一個の主体として、自分を取り巻く世界に意味を与えるながら行動しているように思われる。<sup>1)</sup>

すると、両親や教師という大人たちは、単に子どもの世話をしているだけでなく、子どもが大人たちの世界に適応するよう支援しているのだということがわかる。

それはすでに意味をもつてゐる世界である。物ばかりか人間も、子どもがそれと気付く以前に意味を持つてゐる。幼児は文化的世界の中で発達してゐるのである。それゆえに大人は、できるかぎり子どもが自身の身体の限界を越え、自身の本能的生活を制することができるよう子ども

さらにまた私たちは教育学的な観点からも幼児の発達に

注意を向けなければならない。成長途上にある幼児を観察

を援助しなければならない。それは子どもが一個の人間になるためである。それゆえに大人は、価値と意味とで形づくられている世界に子どもを導き入れることによって、子どもの発達を導くのである。そうすることによって子どもは、行動を発達させるだけでなく、意味を持った世界像を発達させることができる。

この世界にあって母親や父親がそれぞれの役割を持つているように、大人は大人としての役割を持っている。同様に物も物としての意味を持っている。それは主に道具としての意味である。椅子は座る時に用いるためにあり、スプーンはそれを使って食べるためにある。子どもがそれらを操作し、使うことができるようになる前に、すでに大人はそれらの物を用いながらそれとなくその物の持つ意味を子どもに教えているのである。さらに大人は、それらの物に名前を与え、それらの物について話すことによって、それらの物の持つ意味をより明確に固定する。

教育学的立場からは、現実に生きている状況の中の子どもに焦点をあてる。子どもが置かれている状況の中で、大

人は社会的なかかわり合いや語り合いを通して幼児と出会い、大人はまた、大人の持っている教育的役割の中で子どもに出会い、そして子どもに、彼を取り巻く世界は意味のある世界であることを発見させる。それと同時に大人は、子どもが自分自身の世界像をつくりあげる自由を発見することを期待する。それは子どもが一人で意味のある関係を確立する自由をも持っていることを意味している。

教育とは単に子どもを大人の世界に入れるために準備させることではない。教育とは、子どもに自由な時間と空間を与えることである。子どもが大人から手をかけてもらわなくてすみ、両親から学習を期待されることもない自由な時間と空間を与えることである。未来に対する慮りが必要でない時間と空間、今、ここで子どもが安全であると感じじる馴染のある環境。そこは生物的欲求を超えられる空間であり、またそこではまだ意味が固定されていない空間である。自然界と文化世界との間にあるその空間には、子どもが遊ぶ自由を発見することができ永遠に続く時間がある。

両親は子どもを教育する時に、この時間と空間を見い出すと、直にその自由を子どもに与えるのである。両親は大

じめと遊んだり、おもちゃやその他の魅力的な品々を子どもに与えたりする。子どもはそれらのものを、自分がしようとと思う通りにもて遊ぶ。

遊びの自由についてさらに注意を向けてたいと思う。

遊びを観察すると、実際にを行なわれている遊びの動きに特徴的なことは、無駄のない動きではなく、多様な動きであることがわかる。何となれば、遊びは、はつきりした目標を持つものではないからである。目標は子どもの動きをこえてまた玩具との関係を超えて存在するものである。目標に向う無駄のない動きは物が道具として用いられる時に見られることである。この場合には、物は媒介物である。物との対話はそこにはない。

遊びにおける意図は「受感的態度」(pathische Einstellung) であると考えられる。エルヴィン・ショーラウス (Erwin Straus) によれば、それは一つの動きであり、また世界の印象によつてつくられる動きであつて、それは身近な環境に自発的に関与するものである。それとは反対に、計画あるいは目標によつて管理されているものをショーラウスは「知的態度」(gnostische Einstellung) へ名付け

ている。<sup>3)</sup>

ボールやつみ木のようなおもちゃをいじつてゐる子どもを注意してみると、子どもが幾つかのやり方でそれらのおもちゃをいじるべく、おもちゃから働きかけられ誘われていることがわかる。おもちゃは多様な意味を持つてゐる。

そこには固定された使用法はない。

自動車・飛行機・汽車・動物といった日常生活の物をかたどつたおもちゃもある。現実のものをかたどつたものは、「であるかのようだ」という意味を刺激している。人形は「であるかのようだ」子どもであり、子どもはその人形の母親や先生の役をする時に、決して現実世界そのものを模倣はしない。「であるかのようだ」母親や、「であるかのようだ」先生になることによつて、子どもは進んでその役に対する自分自身の解釈を示すのである。

子どもはまた、椅子とかスプーンなどの日常生活に使う物で遊んでいる時にも自由を発見する。それらを用いて遊んでいる時に、子どもはそれらの物の性質を引き出すことさえできる。それらの物は子どもに、物自身を説明する直接受けの影響を与えることができる。テーブルの皿のそばに置かれているスプーンは、物としての性質によつて子どもに

働きかける。子どもはそのスプーンで皿のふちのまわりを突くことでもできる。一脚の椅子が子どもに働きかけて、その中に汽車を見させ、床の上を押して歩かせることもできる。つみ木もまた同様にして汽車を表わすことができる。すでに見たように、物は多様な意味を説き出すことができるのである。

子どもは人からもまた、自分の感情をかき立てる何かを引き出すことができる。「であるかのよのうな」遊びで母親になることは、必ずしも母親との同一視や、母親のするような行動の模倣であるとは限らない。遊びの想像力によつて、子どもは役割を新しくつくり出す。それは子ども自身の感情の表現として体験されたものである。

遊びことによって子どもは現実世界を模倣し、それによつてもう一つの世界——物が固定された意味を持つていないう遊びの世界——を呼び起す。椅子は単なる家具の一つではなく、また、そこに座るためだけのものでもない。椅子はさらに汽車でもありうる。また遊びではお互い同士の約束ごとに自由がある。従つてジョニーは友だちに「今度はぼくが先生になりたい。君はばかな子どもになるんだ

よ」と言つることができる。遊びの想像力によつて子どもは「であるかのよのうな」現実を創り出す。けれども遊びの世界におけるこの自由は、子どもが現実の存在を忘れていることを意味するものではない。母親がジョニーに「さあ、もうお椅子を床の上で押してあるかないでちょうどいい」と

言う時、ジョニーは、彼の遊びの世界での「汽車」が、現実においては椅子であることを忘れていたのではない。遊びの世界は両義的世界である。固定された意味と同様に、規則や必然性が遊びの世界の背景にある。そしてそれらは現実の光の中に入つていって、遊びの関係を壊すことになる。スプーンで遊んでいる子どもを御覧なさい。子どもは本当におなかがすいてくると、それを、食べる道具として用いるのである。

#### 遊びの価値とは何であろうか。

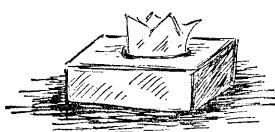
両義的な「であるかのよのうな」遊びの世界に入ることによって、子どもは一つの物の見方を持つ世界の限界から解き放たれる可能性を発見する。これは、感情——脅威や危険などの——を引き起す自由と同時に、それらに打ち勝つ想像力を生み出す自由の発見である。意味を与えること

を発見するんだが、創造性の個人的体験であるばかりでは  
ない。されば、現実の世界への干渉のかかわりに影響を  
及ぼす態度をいつへとやるんだからだ。

(ハーバード大学名誉教授)

国和 栄蔵

- 1) M. J. Langeveld. Das Ding in der Welt des Kindes. Studien zur Anthropologie des Kindes. Tübingen 1964 (3)
- 2) F.J.J. Breytendijk. Wege zum Verständnis der Tiefe. Zürich/Leipzig.
- 3) E. Straus. Vom Sinn der Sinne. Berlin 1935
- 4) E.A.A. Vermeer. Spel en spelopedagogische problemen. Utrecht 1968 (3)



## ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その十六）

海老沢 敏

### 十、遊戲歌としての『ルソーの夢』（承前）

は、こうして、歌は遊戲歌として、幼児たちによつて歌われ、かつ遊戲としての身体運動を伴なうものとして位置づけられるのである。

先に引用したロンゲの『英語キンダーガルテン実用案内書』の第二版序文で、フレーベルのシステムの大きな特徴として『<sup>ナニヤニ</sup>夢<sup>ノン</sup>』になること』が挙げられていた。これはまた『無心の遊び』とも訳したが、フレーベルの教育体系の中では、幼児の活動のかたちを示す「作業」なる概念に対応することは明らかである。

こうした観点から『キンダーガルテンリート』としての『ルソーの夢』、すなわち『楽しき眺め』を考察してみると、すでに触れたように『準備の歌』、あるいは『導入歌』として位置づけられている点が注目される。つまり『音楽体操的運動』に幼児たちが入る前に歌われる目的を設定されていることになる。訳出した五節の歌詞を読んでみると、この歌が、幼児自身によつて歌われるというよりも、むしろ、仲間と仲睦じく遊びたわむれる幼児たちであらわれてくるが、それらはまた一体でもあり切り離しがたいものともいえよう。そして歌もまたそこで重要な意味をもち、不可欠の働きを示している。フレーベル系のキンダーガルテンでいわば父兄や教師の立場から歌われるかたちをとつてゐるのであ

る。それはまたこうした児童たちの交情が、人類の幸福、福祉にもつながるという結論を導き出してしまくられてきているのだ。

なぜ『ルソーの夢』がこうした〈準備の歌〉として、英國のフレーベル幼稚園、英語キンダーガルテンの教育体系の中に位置づけられたかについて考察してみる必要もあるだろう。私は、とり

わけ英國にあって、『ルソーの夢』が、讃美歌として、そしてまた子守歌として、すでにがい間歌いつづけられ、成人のあいだでも、また児童や少年少女たちのあいだでも、だれひとり知らぬものではなく、しかも、この上なく親密なかたちで、万人の記憶の礎に刻み込まれていたためと推測するのである。讃美歌は信仰を同じくするひとたちが、よろこびにつけ、悲しみにつけ、神を讃えるために、共有感情のうちに声を合わせるものであろう。児童たちも、すでにさまざまな機会に、すくなくとも耳から、そのよにして歌われた讃美歌としての『ルソーの夢』の旋律を聞き取り、記憶の中に蓄えていることであろう。その旋律は、しかしさらには初源的な体験のかたちで、みどり児のころから、この上なく親しい人たち、たとえば母親によって、耳許で歌っていたものであったろう。それは母親の聲音のかたちで、児童の魂の中に刻印されていたはずである。とすれば、そのような旋律、歌を、

母親や先生や、あるいは仲間が歌うことによってはじめられるキンダーガルテンの遊戯の世界は、児童たちにとって、はじめからまことに印象ぶかくも親密な世界として立ち現われてくるものであつたろう。『ルソーの夢』の旋律が、ここ英國のキンダーガルテンで、はじめから選び取られたことは、けつして偶然ではない。

フレーベルのキンダーガルテンの運動は、英國よりわずかにおくれて、アメリカ合衆国にも導入されたものであった。アメリカにおける幼稚園の発展の中で、いわゆる〈開拓期〉と呼ばれるのは、ボストンを中心地として、フレーベル主義による教授法が強調された時期とされている。<sup>(注8)</sup> 英国におけるキンダーガルテンの運動にひとつ転機をもたらした一八五四年のロンドンにおける教育博覧会は、アメリカからこれに参加した教育指導者たちにも強烈な印象を刻み込んだものであった。アメリカ合衆国連邦政府教育長官ヘンリー・バーナードは、フレーベル幼稚園紹介の一文を『アメリカ教育雑誌』(第二卷、一八五六年)に掲載したが、これを「アメリカにおける幼稚園に関する最初の文献」といわれるものである。

(注8) 『世界教育史大系21—児童教育史I』三二二ページ。

(注9) 同右書三一四ページ。

この論説が発表されるに先立つて、前年の一八五五年にはヴィンスコーン州のウォータータウンで、ドイツ系のカール・シュルツ夫人なる女性により、アメリカ最初の幼稚園が開設されていた。この夫人はドイツ在住時代にフレーベルから幼児教育に関する指導を直接受けたこともあり、亡命先のアメリカでフレーベル流の幼児教育を実践しようとしたものであった。さらに一八五八年にはオハイオ州のコロンバスで、おなじくドイツでフレーベルに直接教えを受けていたキャロライン・ルイーズ・フランケンベルク夫人によって第二の幼稚園が設立されたあと、一八六一年には二園、六二年にはニュー・ヨークで二園と確実にドイツ系のフレーベル主義幼稚園が増加し、一八七〇年までの十五年間にドイツ人によるドイツ語会話幼稚園の数は十園に達したという。

(注10) 同右書、三一四ページ三一五ページ。

こうしたアメリカにおける幼稚園教育の「開拓期」にあって、とりわけ重要な存在は、エリザベス・ペーマー・ピーボディ(一八〇四一九四)である。ボストンで書籍業をひらいていた彼女は、フレーベルの主著『人間の教育』に深い感銘を受け、かつ、既に紹介したバーナードの雑誌論文に触れて、幼稚園教育に関する烈しい情熱を燃え上らせたのであった。彼女は一八五九年には

シャルツ夫人の訪問を受け、翌年、ボストン市ビンクニー街の自

宅で、「アメリカ最初の英語会話幼稚園<sup>(註11)</sup>」を開いた。彼女の義理の弟にあたるホリス・マン(一七九六—一八五九)はアメリカの名高い教育行政家であった。ピーボディはフレーベルの理論と実践をより深く高めるために、一八六七年にはドイツに赴き、フレーベルの末亡人ルイーゼ・レーヴィンに就いている。翌年帰国した彼女は、「フレーベル主義の普及徹底のために定期刊行物を発行したり、数多くの著作や論文あるいは教授や講演を通して、アメリカにおける幼稚園教育運動の先駆的な伝道者としての役割を果すことに、その余生を捧げてきた」のであった。

(注11) 同右書、三一六ページ。

(注12) 同右書、三一七ページ。

こうしたピーボディ嬢の幼稚園教育活動の中から生み出された文献のひとつに『幼児の德育とキンダーガルテン案内書<sup>(註13)</sup>』がある。初版は一八六三年の年号をもつており、前述のホリス・マンの夫人で、ピーボディの妹マアリーとの共著である。

(注13) «Moral Culture of Infancy, and Kindergarten Guide, With Music for the Plans. By Mrs. Horace Mann and Elizabeth P. Peabody. Sixth Edition. New York: J.W. Schermerhorn & Co., 1876.

これがこそ、アメリカにおけるキンダーガルテンならびに幼稚園

に関する最初期の文献のひとつであり、とりわけ重要なものといえよう。公刊後十三年で第六版という重版の数は、この書物がアメリカでキンダーガルテンの文献としてひらく読まれ、普及していくことを端的に物語っている。

この書物は「アメリカのキンダーガルテン」と銘打たれた本論全十三章のほか、ヘアリー・マン夫人による「幼児の德育」と題されるおよそ一〇〇ページのエッセイからなり、さらにそのあとに一〇ページに亘り、合計二〇曲の歌が収録されている二三〇ページ弱のものである。フレーベルの幼児教育思想を基礎としながらも、こと音楽に関しては英國における英語キンダーガルテンの歌を全面的に取り入れていることは、巻末の譜例を一瞥すれば明らかであろう。ただし、ジャンル別の区分はおこなわれておらず、また曲数も三分の二ほどに減じている。

この「アメリカのキンダーガルテン」にあっても、音楽と遊戲、体育、踊りが重要視されていることは言うまでもない。第三章「音楽」の冒頭では、「キンダーガルテンに必要とされる第一のものは音楽である」と謳われており、その根拠として「旋律を声に出して歌うことは、子供の意志を統御し、あるいはむしろ無秩序の原因である気まぐれをなくしてくれる」ことを挙げている。さらに続けてこの案内書では、学校が始業される際に歌われるも

のとしての二つの讃美歌を紹介している。そのひとつは《主の祈り》であって、これは楽しげな音楽につけられていて解説されているが、これは《英語キンダーガルテン実用案内書》のもう一曲の《準備の歌》である《仕合せなおうち》の旋律に「あめにまします／われらのちわよ／聖名をあがめて／たふとませよな》(《新選讀美歌》第二十六)の原詩《Our Father, who art in heaven》をあてはめたものである。

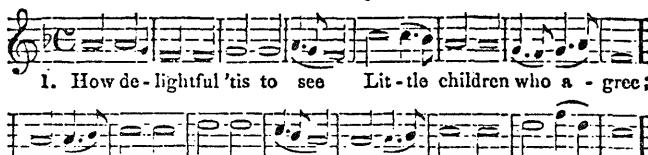
(注14) 同右書、一一一ページ。

もう一曲の《讃美歌》こそ、タイトルは挙げられていないが、《準備の歌》、園の活動をはじめる歌としての《ルソーラの夢》にはかならない。この曲は、この「アメリカのキンダーガルテン」案内書では、《魚》をはさんで第三曲として置かれ、《兄弟愛(Brotherly Love)》なるタイトルがつけられているが、五節からなる歌詞は、すでに訳出紹介した《樂しき眺め》とまったく同一である。(譜例③) なお、このアメリカ版キンダーガルテン案内書の第三章では以下、音楽の初步の学習について論じられ、じつさいの学習課程が具体的に説明されている。その内容についてはじつや紹介することはできないが、注目されるのは、ド・レ・ミ・フ・ア・ソ・ラ・シ・ドの代りに数字1から7までが音階(長音階)の各音にあてはめられ、数字による唱法で音階の学習がおこなわ

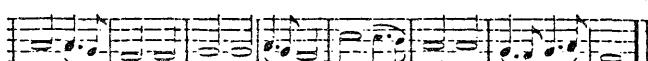
## ▼ 譜例③

## SONGS.

## III. Brotherly Love.



Who from every thing ab-stain, That will give each oth-er pain;



2.  
Angry words they never speak,  
Promises they never break;  
Unkind looks they never show;  
Love sits smiling on each brow.  
O, how lovely, &c.

3.  
They are one in heart and mind;  
Courteous, pitiful, and kind;  
Willing others to forgive,  
And make happy all who live.

When at home, at school, at play,  
They are cheerful, blithe, and gay;  
Always trying to increase  
Human pleasure, social peace.

4.  
If we for each other care,  
All each other's burdens bear,  
Soon the human race will be  
Like one happy family.  
O, how lovely, &c.

このアーノルド・キンダーガルテン案内書ではつづく第四章「遊戯、体操、踊り」において、卷末の実際的な『遊戯歌』の説明がおこなわれていることを注記しておきたい。

なお、アメリカにおけるフレーベル流のキンダーガルテンの案内書として知られているものには、アーノルド・ドゥーアイの『キンダーガルテン』<sup>(注15)</sup>がある。この書物には出版者シュタイガーナンダーガルテン<sup>(注16)</sup>を一八五九年に設立したものと考えられる。それはドイツ人子弟のための私的な学校であったが、ドゥーアイはその後フレーベルの学園で訓練を受けたドイツ人教師を呼んで、自らの子供の教育にあたらせたという。こうした経験から、ドゥーアイはより規模の大きいキンダーガルテンで教育にあたる教師たちの指導のための案内書を書くことを思い立ったのであった。勿論この書物の特徴をあげつらうことは、ここでは適当ではないが、この著書に収められた合計四十六曲におよぶ遊戯歌、児童歌の中には、『ルソーの夢』の旋律が見出されないことがだけは触れておきたい。これらの歌にはいずれも英語とドイツ語

れるよう提案され、それが実践されていることである。ここではいわゆる楽譜の学習が目指されているのではなく、したがって、数字譜の提案がおこなわれているわけではないが、数字による音

樂の初步の学習という着想については、ルソーとの関連でいざれまた立ち戻つて論じなければならない。

の歌詞がつけられ、どうひどく歌えるようになつてゐるが、フレーベル系のドイツ語ならびに英語の歌曲集からひらく集められ、ドイツ民謡、あるいは民謡化したドイツ歌曲（たゞえはモーザー・ルトの『春への憧れ』〔K五九六〕など）が見出されるのである。

(注15) 『The Kindergarten. A Manual for the Introduction of Fröbel's System of Primary Education into Public Schools; and for the use of Mothers and Private Teachers by Dr. Adolf Douai. New York: E. Steiger. 1871.』

(注16) 同右書v.一。

## 十一、日本人の歌として

前章では『ルソーの夢』が英國やアメリカ合衆国において、フレーベル系統の幼稚園、いわゆるキンダーガルテンの中で、『遊戯歌』として、そして幼児の心身を遊戯へと集中させる（準備の歌）として歌われていつたことを述べたが、この『ルソーの夢』の旋律、すなわち『むすんでひらいて』の節は、現在でも英國では幼児たちに親しまれているといわれる。

ところで、こうしたフレーベルのキンダーガルテンの幼児教育システムが、日本に紹介されたのは明治初年のことであった。日本において、幼児のための教育が制度上の規定としてはじめて定められたのは、明治五年（一八七二年）であった。この年の八月三日には頒布された学制の第二十二条には「幼稚小学ハ男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ」と謳われている。しかしながらいわゆる尋常小学校を主体とした小学校教育をはじめとして、中等教育、高等教育の制度は、この学制を基礎にして強力なかたちで体系化されていったのに対し、『幼稚小学』は一校も開校されることはなく、無力な規程にとどまっているのみであった。その理由は学制の範となり基礎となつたフランスの学制における幼児教育機関の規程を形式的に導入したためと考えられており、こうした事情から、日本における「幼児教育機関の発展は、この幼稚小学とはかわりない姿で、実体化されてきた」<sup>(注2)</sup>といわれる。こうした点でもっとも大きな影響があつたのが、「我が國で『幼稚園』という名称で最初に開設された東京女子師範学校附属幼稚園」であったとされてゐる。明治九年（一八七六年）の創設である。

(注1) 『世界教育史大系21—幼児教育史I』111111ページ。  
(注2) 同右書三三二二ページ。

だが、それに先立つ幼児教育の試みと、その中に位置づけられた『遊戯歌』について語る必要があるだろう。第三章および第四

章で主人公をつとめていたほかならぬ伊沢修二が『小学唱歌集

初編』の編集刊行をおこなった中心人物であることはくりかえす

までもないが、彼が唱歌集を編集することで、小学校の音楽教育

の中心的な拠り所を創り上げるにいたるにはいくつかの重要な体験を経ることが必要であった。そのなかでもとりわけ大きな経験はアメリカ留学であろう。この伊沢修二のアメリカ行にあづかって力があつたのはアメリカ人デイヴィッド・マリー（一八三〇—

一九〇五）であった。マリーは一般にモルレーないしモーレーと呼ばれているが、ラトガース大学教授に在任中、駐米代理公使森有礼の推薦を受け、日本に招かれ、文部省学監となり、明治六年から十一年まで、この職にあつた人物であり、日本の教育制度確立にあずかつて力があつた存在である。そのマリーが伊沢修二

のアメリカ留学を強力に推したのは、伊沢の手になる『唱歌遊戯』に關する文章が彼の目にとまつたためといわれている。<sup>(注3)</sup>

（注3）上沼八郎著『伊沢修二』（『人物叢書』）日本歴史学会編集  
吉川弘文館発行 五四ページ。

それは文部省が発行していた官報にあたる『文部省第二年報』（明治七年）に掲載された『愛知師範学校年報』の一部である。

伊沢修二是明治七年三月、「第二大学区愛知師範学校長」に任命されたが、當時、若冠二十四歳であった。その伊沢校長によつて

認められた報告書の当該箇所を引用してみよう。

（注4）同右書、四九ページ。

「将来學術進歩ニ付須要ノ件

唱歌嬉戯ヲ興スノ件 唱歌ノ益タルヤ大ナリ第一知覺心經ヲ活発ニシテ精神ヲ快樂ニス 第二人心ニ感動力ヲ發セシム第三發音ヲ正シ呼法ヲ調フ以上ハ幼生教育上唱歌ノ必欠ク可ラサル要旨ノ概略ヲ擧クルノミ其細目ノ如キハ喋々此ニ辨セス我文部省早ク此ニ見アリテ小学校中唱歌ヲ載スト雖モ未タ実ニ其科ヲ備フルモノアラス今吾輩西洋ニ於テ著名ナル教育士フレーベル氏其他諸氏ノ論説ニ從ヒ先本邦固有ノ童謡ヲ折衷シテ二三ノ小謡ヲ制シ日ヲ累ニ年ヲ積テ大成全備ノ効ヲ奏センコヲ期セリ即チ其一二例ヲ左ニ示ス

唱歌ハ精神ニ娛樂ヲ与ヘ運動ハ支體ニ爽快ヲ与ニ者ハ教育上并ヒ行シテ偏廢ス可ラサルモノトス而シテ運動ニ數種アリ方今体操ヲ以テ一般必行ノモノト定ム然レモ年齒幼弱筋骨軟柔ノ幼生ヲシテ支體ヲ激動セシムルハ其害却テ少カラスト是レ有名諸家ノ確說ナリ故ニ今下等小学校ノ教科ニ嬉戯ヲ設ク即チ左ノ圖ニ因テ其一二例ヲ示明ス

そしてこのあとに、三曲の唱歌とその遊戯の仕方が説明されているのである。（つづく）

（国立音楽大学）

# 私の幼児教育論（一）

——保育実践に対する研究のかかわり——



小川博久

## はじめに

教育研究者にとって「教育論」という用語に「私の」という言葉をかぶせ、その表題で文章を書くことは、大変勇気のいることである。というのは、私の書いたものが「教育論」とよぶに値するかどうか、はたして「理論」とよべるほどの構成がなされているかどうかがまず問われるからである。さらに「私の」という言葉の重みにふさわしいオリジナリティ（独自性）をもつてゐる。

かどうかが自問されなければならないからである。私にはここでそうした「論」を提出する力量はまだない。しかし、編集者から提供されたこの執筆の機会を私の自己表出のためにぜひ生かしたいと思い、私の研究方法論を語ることでこの表題の内容としたい。研究というものは、以下のべる意味で「虚業」であると私は思う。ここで「虚業」とは虚構をつくりあげることを自分の任務とする仕事であるということである。この虚業性への自覚こそ「実業」としての保育実践に研究が寄与する道であると私は考え

## 「保育実践を遠く離れて」

右の小見出しが、昔みたオムニバス・ドキュメンタリー映画「ベトナムを遠く離れて」の私流のパロディである。この映画で大変印象的だったのは、あの有名なヌーベル・バーグの巨匠、ジョン・リック・ゴダールの作品である。他の映像作家（監督）がベトナム戦争の中に飛び込んで、生々しい記録を送つてきたのに、ゴダールはパリの郊外の丘の上で、映画スタッフとカメラを回している場面しか撮らなかつたのである。最初これを見た人はふざけていると考えたに相違ない。他の作品が各々ベトナムの悲惨にして残酷な現状を克明に訴えているのに、ゴダールのそれは、あまりにのんびりと怠惰にさえみえる映画屋の姿だつたからである。

しかし、よく考えてみると、ゴダールのこの姿勢こそむしろ厳しい自己凝視ではなかつたか。ヨーロッパのカメラマン（映像作家）達が、ベトナムの戦場を命を賭して駆けめぐり、戦争の生々しい実態を伝えたことは、たしかに貴重なことである。しかし、かれらは、自分の国土を戦火に晒し、肉身や友人の死に遭遇したベトナムの人ではない。平和で何事もないかのように思われるヨ

ーロッペから来た観察者にすぎない。ここはベトナムではない。平和なヨーロッペなのだ。そうゴダールはいいたかったのではないか。

また、カメラマン達が取材中、死と背中合わせの体験をしたとしても、かれらが伝えるものは、従つて観客が受け取るもの、スクリーンに映された虚像にすぎない。それは、かれらの体験そのものではない。虚像として構成されたものである。「私は一介の映画屋にすぎない。私の仕事はその虚像をつくることなのだ」とゴダールはいいたいのではないか。もしそうだとすれば、ゴダールの主張は一見、映画をつくる仕事を否定し、映像（虚像）に価値をおいていいかのようにみえる。しかし、私はそうは思わない。ゴダールの一見、自己否定のように思われる姿勢は、つぎのような自己への問い合わせなのである。映画をつくるという仕事はどういう仕事か、それはどうあらねばならぬか。映画をつくることによってなにができる、なにができないか。映画をつくることによつて、現実（戦火のベトナムと平和なフランス）にどのようになかわりうるか。事実、その後、かれは自分の作品において、映画をつくるからくりを暴いてみせてくれる（たとえば、「彼女について知つて二三の事柄」）また、観察者（映画製作者）であることが、同時に、時代状況への参加者たりうるかを、カメ

ラ・アングルの設定のしかたの問題として追求している。(例「男性・女性」)。たとえば、男と女の会話で、画面の左か右の端に対

話者一人を映し、画面の外の対話者のもう一人と会話をさせる。

画面につねに一人しかうつらない。これは、監督であるゴダールがどこに視線(カメラ・アイ)を投げ、観察者として現実をどう切り取っているかを観客に意識させるという手法である。(詳しく述べ、臯月一「私の映像ノート(Ⅱ)」—ゴダールをめぐってー、死寝魔十二月号六／八頁参照)

私が保育を觀察し、時に保育について文章を書くとき、私はこのゴダールの態度から学ぶものが多い。まず私は保育者でもなく、幼児でもない。私は保育の觀察者にすぎない。私が提出したのは、保育で實際におこったこと(保育の事態とよぼう)ではなく、保育について書かれた文章にすぎない。それは、文字という記号によって表わされたものでしかない。だからこの文章を書くという営みはゴダール流にいえば、さしづめ「保育実践を遠く離れて」ということになるだろう。

また、かりに私が保育者であって、自分の保育について文章を書く場合でも、私の体験がそのまま文章の内容であるということはない。保育について記述するという行為は書き手としての自分を保育者としての自分から分離しなければできないことではない。

書き手である自分が体験者である自分(保育者)と改めて捉えなおすのである。これが体験を記述するということである。体験を捉えなおすということ、体験について書くということは、体験を一定の視点からみなおすということである。保育の体験を記述するとき、書き手は体験者である自分がもたない目的をもつていてある。保育体験者はなぜ自分の保育体験を記述するのか。それは保育の事態の中で、特に感動したこと、特に問題だと思ったこと、自分の注意をひいたことなど、第三者に伝えたいときに書くのである。それゆえ、書き手が文章として構成したものは、書き手の視点に基づいて一定の目的のもとにとらえなおされたものであって、保育の事態そのものでもなければ、保育者の体験そのものでもないのである。

さらに、文として構成されるということは、言葉という記号で伝えられることしか伝えられないという点に注目する必要がある。なぜなら、それは保育の体験や保育の事態と、保育についての記述を区別する一つの重要な目やすだからである。たとえば、幼児が「すごいなー」と云うのを保育者が見聞したとしよう。保育者はこの発言に注目し、それを自分のメモ帳に、A男「すごいな！」と表現したとしよう。保育者ならば、A男がこの発言をしたときの目の輝き、息づかい、身振り、発話の音の強弱などを思

い出すことができる。またなぜそういったのか、その発言にどのような意味があるのかもわかつている。しかし、その保育を見ていない読者がこのメモ帳の「すごいな！」という表記を見ても、保育者がその表記について抱くとの共通なイメージを抱くことはできない。この発言の際のA男の目の輝きとか表情などはこの表記からはわからぬ。このことは、「すごいな！」というA男の発言をめぐる状況全体から書き手が「すごいな！」という形で表記されるものだけを抽出したのだから、当然といえば当然である。つまり、保育について記述するという行為それ自体、文字記号であらわせるもの、伝達されるものだけを選択し、他の文字記号化されないものは無視するという決定をおこなうことなのである。このことは、記述内容を増加し、詳細にしていくことによっても原理的に解決されない。たしかに、A男の例の発言の際の表情、身振り、環境などを書き加えることによって、その時の状況をイメージ化しやすくなるだろう。しかし、どこまで記述すればその状況を正確に記述したかという問いには答えない。なぜなら、記述するという行為は前述のように文字記号で伝達しうるものを選択する行為であり、この選択の仕方は記述が増加するにつれて無限になるからである。たとえば、「目は輝いていた」と記述すれば、つぎはどんなふうに輝いていたか、それに対し、

「キラキラ輝いていた」と記述すれば、「キラキラ」とはどういうことかというようないどいまでもはてしないのである。といふことは、記述したものは、それがいかに生き生きとした、あるいは正確な描写だとしても、それは状況そのものではない、あくまでもそれはつくりもの（ファンション）だということである。だからこそ、当事者は第三者に向って、A男の状況はことばでいつても伝わらないなどというのである。そしてそんなとき、写真とかテレビカメラなどが伝達手段として考えられよう。しかし、これらも、現実の状況に代るものではない。それらも文字記号とはちがつた形で、状況についての選択をともなうのである。

一般に保育者の保育記録には記述を虚構と考える意識はない。A男が「すごいな！」と発言した状況に居合わせた保育者にとってみれば、メモ帳にA男「すごいな！」というと書くだけで、その時の状況やそこでの事情が想起される。自分のメモ帳に書くかぎり、それはそれで批判されるべきではない。しかし、その状況に居合わせない読者にその状況を伝えようとするには、読者が解釈可能な形で、「すごいな！」発言をめぐる状況について再構成しなければならないことに気がつかない保育者が多い。このことは批判されるべきである。

保育の研究においては、虚構を作ることが自己の課題であると

いう認識は増え要求される。なぜなら、研究という仕事は、保育について語る、記述するというレベルにとどまることはできないからである。保育について記述されたものをデーターとして、それについて考えるという仕事である。そしてこの「考える」という活動は言葉を使うことによっておこなう。だから研究は記述されたもの（構成されたもの）についての記号操作（再構成）ということになる。私が研究を「保育実践を遠く離れた」仕事であるともじつたゆえんがここにある。研究とは虚業つまり虚構をつくる仕事なのである。しかし、私は虚業という言葉を否定的に使つてはいない。むしろ逆に、そのことへの自覚が研究を実りあるものにし、保育実践に寄与しうるのだと考えている。

### 実業としての保育実践と虚業としての研究

小説を書くにしる、評論や研究論文を執筆するにしる、文章を書くことを業とする職業を私は虚業だと考へている。虚業というのは、既にのべたように、虚構（フィクション）を構成する仕事という意味である。これに対し、保育実践、臨床上の行為などを実業とよびたい。両者を区別する基準はそこでおこなわれる言語活動にある。

一方、文章を書くという言語活動において言表の意味を規定するのは、文の構成とそこに含まれる語彙の意味、それの複合である文脈（書き手の伝達ないし、表現目的を実現するための文章の構成を定義しておく）である。この文脈のつくり方には、当然のことながら書き手の生活体験が影響を与えている。しかしこの影響は、直接、文字記号に表現されるということはない。いいかえれば、文を構成するには、言葉の意味論的規定（各々の語はなにをさし示し、あるいは含意するかについて言語使用者に共通に承

りする作用であって、これは対話にともない、参加者各自の感情の緩和の上に成立する雰囲気であると定義しておく）に規定される。そしてこの場は作用者、被作用者の相互の役割についての相互認知、両者の空間距離、それ以外の物的・人的条件（集団か、対話だけか等）、空間を共有している時間の長さ等によって規定される。したがつて保育者が幼児に「……しようね」といった言語活動の意味はその時々の場によつて異なる。言表の上では同じでも、幼児に与える影響も、そうした言語活動への教育的評価も、同じではないのである。

認されている常識）や構文論的規則（文を構成するさいに従うべき規則）に従わなければならない。だから、体験は伝達可能な文に構成されなければならぬ。ただし、それが伝達可能、つまり読解可能であれば、どのような語彙を選ぶか、どのような文をつくり、それをどう連ねるかは書き手の自由である。書き手が自分の体験を伝えようとするとき、どのように書き出し、どのような筋で文を並べるかの自由を書き手はもっている。このように、書くという行為は、どういう文脈で文章を構成するかについては、多くの自由をもっているが、語彙の選択、文の構成に関しては厳しく拘束される。でなければ意味は正確に相手に伝わらない。書き手は自分の伝達目的を明確に表現できるような文脈を構想し、文構成上の規則に厳しく従うことによって文章を書かなければならない。この点は、後述するように、対話の場における言語活動と著しい相違をなしている。

書くという言語活動が右のような特質をもつということを読者との関係でいえば、書き手は読み手に直接拘束されずに、自己完結的に文脈を設定する権限をもつということを意味している。文章が活字になるとき、活字になるものには普通、署名、文責者名に相当する。これは書き手が自分の提出した文脈に対し責任をもつこ

とを意味する。うらがえしていえば読者には責任はないということである。だから、書き手の提出した文脈を読者がどう解釈し、どう評価しようと読者の勝手である。書き手は自分の意に反して解釈や評価を受けても、これを封する権限はない。自分の言わんとする趣旨はこうだとわざわざ解説し、弁明文を書くことはできる。しかしそれによって、最初の自分の文章への一般的解釈傾向を変更することができなければ、その文章への評価を書き手は甘受せざるをえない。

このように、文章を書くことによって自分の意図を伝えようとする仕事は、自分の自由裁量で文脈を決定できるかわりに、一度投げ出されたものは、フィードバックがきかない。文章を書く過程には読者のフィードバックがないので、書き手は、「頭の中」で仮空に読み手の意識を想定するしかない。研究が虚業であるといふのも、書くという活動にその要因が見いだされるのである。

(つづく)

(東京学芸大学)

\*

\*

## コマ・独楽・こま

### 八木田宣子

女ならだれだって、「女って損だわ」と思ったことが一度はあるに違いない。わたしなんか、数えきれないほどあるけれど、現在、「ああ、損だった！」とつくづく感じる

ことは、小さい時コマ遊びをしなかったことである。わたしの幼い頃は、男の子の遊びと女の子の遊びが、ハッキリ分かれていたのだ。

わたしは三〇過ぎてから、コマの魅力にとりつかれた。はじめは、小さいひねりゴマ（指先でひねってまわすコマ）であった。自分が力を与えたコマがまわっている。それをじっと見ていると、まるでコマは生きているようで、自分がまわしてやったオモチャとは思えない。そして、止ま

る時の、いかにも未練げなようす。止まつたとたんに、すぐ又まわしてやりたい気持になつてしまふ。

その次に夢中になったのは、ひもをまいてまわすコマであつた。なにしろ、小さい時まわした経験がない上、生まれついての不器用ときていてるから、なかなかうまくいかない。それでも、コツという是有るもので、それをのみこんだとたん、ズグリや大山ゴマ（いずれも、まわしやすい木ゴマ）程度は、簡単にまわせるようになった。

もみゴマの場合は、二、三歳の児児にもまわせるほど、まわし方が簡単だから、まわした結果しか心にとまらないが、大きなコマになると、「まわしたあ！」という実感は

大きい。するするとほどけていくひもを、さいごにキュッと引く。すると、コマは勢いよくまわりだす。その手ごたえが心地よくて、一時は家の者があきれるくらいやつた。

ああ、男の連中は、小学校の低学年からこの手ごたえを感じ、しかも、何人かで集まつては、火花を散らしてのコ

マの戦い。いいなあ、と、シェラシーを感じるのであります。学校では、トバク的行為が何のと言うけれど、とつた、とられたの、どこが悪い、人生そのものではないかーーと、このへんまで友人に話したら、言われてしまつた。

「あなたの息子はどうなの？」

そこなのです、問題は。

わたしがコマに魅入れられたのは、ちょうど息子がよちよち歩きの頃の、その後、我家のコマの数は加速度的にふえつづけた。自由にさわらせたので、息子はコマで遊んで大きくなつた。しかし、しかしである。息子は友達とコマで遊ばない。だいたい集団で遊ぼうというふんいきがほとんどない上、コマをまわせる子は小学校のクラスで一人か二人だという。あんたがみんなをさそつたら? と言つた

し、わたしと一緒に「コマの会」(コマを愛する大人の趣味の会)に出かけるし、お客様が来ると、母親がお茶を入れているあいだに、めずらしいコマのまわし方を説明して、間をもたせたりしている。子供というより、まるで大人の趣味人のような態度。

このごろの男の子は、わたしのシェラシーの対象にはならないようである。さて、わたしのコマ狂いはエスカレートし、今度、とうとう本を書くことにまでなつてしまつた。そのカラーページに、小学生がコマをまわしている写真をのせたいと思ったが、まわせる子がなかなか見つからない。いろいろさがして、S家の男の子二人がいい、ということになった。我家の息子の小学校時代の同級生の女の子の弟——という、ややこしい関係である。S家では、お父さんが、男の子はコマぐらいまわせないといけないと言つて、一緒にコマを買いに行き、庭でまわし方を教えたといふ。この子たちは私立の小学校にかよつており、その小学校は、ふつうの公立校と違つて、遊び道具を学校にもつていつていのいだそうだ。S家兄弟の影響で、学校ではコマが大いにはやつてゐるといふ。まわさせてみると、あまり上手ではないが、「趣味人」めいた我が息子とは違ひ、

毎日集団でまわしていることが、よくわかる。

それにしても、人類とともに歩んできたような古いおもちゃ、コマ。これからはどういう運命をたどるのだろうか。

もうすぐお正月。俗に、コマはお正月の遊びとなつてい

る。昔がき大将だったお父さん方、駄菓子屋でもデパートでもいいから、とにかくコマ（なるべくひめでまわすもの）を買って、子供といっしょにまわしてみていただけませんか。そこから、何か生まれるかもしません。

（作家）



## 羽子板

皆川美恵子

『羽子板』と題された、羽子板については歴史といい、製作方法といい、羽子突き唄といい、その関係するところ多くを記述し、写真、図版を豊富に付して一巻とした書物がある。著者は山田徳兵衛氏で、浅草橋吉徳の現会長である。昭和十二年の、「どうやらで、夜、羽子をつく音」が耳にとどく暮に、芸艸堂より上梓されている。当時、限定千部のこの織麗な本は、暫くして起る戦禍を潜り、今や稀観本となっている。

羽子板について何か言う時、人はまずこの『羽子板』を手に執り、丹念に眺めるようだ。玩具辞典の類の羽子板の説明は、山田徳兵衛氏の探索の労に拠っている。この探訪記事を取材し、一文をまとめるにあたり、わたしはまず『羽子板』の借覧と羽子板製

作者の紹介とを山田徳兵衛氏に懇願した。氏は篤実温厚のお人柄から快く承諾してくれた。明治二十九年生れの山田氏は現在八十三歳。『羽子板』は二十代の後半から十年余を費やし、全国に羽子板を尋ね歩き、御自分で写真を撮りなどしてまとめた御本という。

『羽子板』の本を先程わたしは織麗と述べたが、中央から上を水浅葱、下を白に染め分け、状異なる三種の羽子を、朱、緑の色を少し配し薄墨で描きあげたうつくしい布の表紙である。この意匠を手がけたのは、人形収集や研究で名高い日本画家の西沢笛畠氏である。ちなみに笛畠氏は、本誌創刊号表紙を考案した荒木十畠氏と同門で、荒木寛畠氏の弟子という。

さて『羽子板』の貢を繰ると、倉橋惣三先生が序を寄せておられた。紹介してみると、

### ●押絵羽子板

「日本人はえらい。子どもが戸外の遊びに使ふ一枚の板切れをさへ、こんないい形に型どり、こんな豊富な趣味に飾る。私は羽子板を見る時いつもそう思ふのである。木の実に鳥の羽毛を植えて浮力をつける工夫までは、他の国にあることとして、その板に特に桐を用ひ、それをまた綿を包んだ絹の押絵の浮きはりにするに至っては、何んといふこまかん気の入れ方であろう。あの重くない重み、あの響かない響き、それは、手にも耳にも、一種独特の、ふつくらとした柔い快感を與へて、この遊びの興味を完成させてゐる。」

と述べられ、統いて羽子板一枚に周到な心を使うことは、「大人が子どもに先んじて楽しんでゐるのである。子どものためだから自分達のためだか、区別のつかないゝ心持になりきつてゐるのである。」とし、著者であり羽子板を商う山田徳兵衛氏に対し、

「こうも念入りに美化して、自分が先づ楽しみながら子どもに与へて呉れた、大人の心入れの方への礼讃を以て序にかへる。」と感謝の氣持を添えて結んでいる。

山田徳兵衛氏は、押絵羽子板の製作者として高瀬弘巳氏を紹介してくれた。『羽子板』での永井周山はこの世に亡く、次の時代の名人桜井春山は病に倒れ、今は仕事を止している。高瀬弘巳氏は三十七歳、これからが期待される仕事熱心な押絵面相師である。

押絵羽子板で何が大事といつて、一番ものを言うのは顔であろう。目であろう。面相の出来が悪ければ誰も羽子板を買わない。面相師の伎量が羽子板を決めるのだ。面相師は絵師でもあり、浮世絵版画の下絵のような墨の線による白描の下絵を描く。この下絵をもとに型をおこし押絵が作られていくのだが、数ある押絵師のなかで、絵師として下絵まで描ける人は少なく、全国で八人位という。

高瀬さんは下絵を描くため古い羽子板を見て廻る。あるいは歌舞伎の舞台に足を向ける。新しい羽子板を作り出すため、自分の中に飛びこんでくるものとの出会いをひたむきに求めている。つまり仕事に気魄がこもつてくる。苦心の下絵が柿渋を塗った和紙に描けると、厚紙（張蓋）に下絵の線をへらで写してゆき、その

線を切り、顔、手、道具、背景と三十幾余かの厚紙の型を作る手順となる。その型紙に布を合わせ、中に綿を入れ、縁を糊で貼つてゆく。そしてそれぞれのペーツをまとめ上げていく。下絵にあわせて一片／＼を組み合わせ、裏から美濃紙を貼つて全体を固め押絵の細工が完了する。

ここで顔の作り方の詳しい説明にとりかかってみよう。顔の型には絵絹を当て、中に綿を入れ糊づけしてくるみ上げる。その絵絹の上に絵具の滲みを防ぐため礪水（明礪をとかした水に膠液を加えたもの）をかけ、胡粉で地塗りをする。次に隈<sup>くま</sup>を置き、上塗りをかけ、日本顔料で目、口を描いてゆく。隈の入れ方、瞼から目の描き方は、同色の濃淡で重ね描きし立体感を出していく。縫<sup>しん</sup>絹彩色の技法に適っている。こうした丹念な顔作りには二十五工程余はあり、羽子板作りの要となる。最後に黒く染めた生絲<sup>すが</sup>をふき、髪がのって押絵は完成する。あとは板屋さんから仕入れた桐板に押絵を載せ、固定させればよい。そして裏絵を描く裏絵師の手を経て羽子板となる。

高瀬さんは二代目の押絵師で、初代の父親辰美氏が戦争中浅草から疎開し、そのまま埼玉県の所沢に住みついた。所沢の地は今では羽子板の業者が多く集まり、押絵羽子板は県の伝統産業品に指定されている。

### ● かちかち羽子板

子どもたちが羽子を突く羽子板は、押絵羽子板というより街のおもちゃ屋で売られている安い羽子板だろう。押絵の美しさを鑑賞する力は、子どもたちにはまだ備わっていないように思われる。倉橋先生がいみじくも言うように、押絵羽子板は子どもに先んじて大人が楽しんで作り出したものにちがいない。子どもたちは入念な技をこらした高価な押絵羽子板は飾り置き、戸外においては安手の羽子板でこそ追羽子に興じたようと思う。

柔い桐ではなく、固い朴の木で作られるそれら羽子板は、かちかちというかん高い音をたてるところから「かちかち羽子板」と呼ばれたりする。児童文化探訪としては、子どもたちに身近なこの羽子板こそ取りあげるにふさわしい対象にはちがいない。東京では足立区に一軒のみこの羽子板を作っている人がいた。山本久光氏七十四歳、奥さんの花子さんと一年間に十万枚の羽子板を作り、正月の子どもたちの許に贈り届けている。

電話で教わった通りに家を尋ね行くと、羽子板の上に「御用の方は呼鈴を」と書かれ、その羽子板は長年月のしるべを果したとみえ、黒ずみながら門扉にのどかにとまつっていた。

山本さんのところでは、現在スクリーン印刷により羽子板を大量に生産しているが、以前は焼絵をやり、泥絵具による刷絵をやつてきたという。焼絵羽子板は大正の初期に始まり流行をみた。

白金の針を用い、針の中で揮発油を燃やし高度の熱を起し、絵の輪郭線を焼き描いてゆく。焦げた輪郭線の中は、筆で彩色してゆく。戦後もこの焼絵羽子板を作っていたが、手数がかかり注文の数をこなせず、もつと簡単に、大量に、安く作れる方法がないかと思案をはじめた。まず思いついたのは、高野紙で型をとり、その型を羽子板の上に載せ、泥絵具で刷り込むことだった。

ところが泥絵具で彩色した羽子板は、店に置いておくと、陽に焼け色が褪せ、大いに困ったらしい。高野紙による型紙もすぐ摩り切れる。そこでブリキで型をとり、その型の上からコンプレッサーによりラッカーを吹きつけはじめた。この方法は材料のラッカーバルを大量に要し、かえって高いものについた。こういう試行錯誤ののち、十年程前に現在行なっているスクリーン印刷に到達した。

スクリーン印刷とは早く言えば謄写版印刷で、色の塗り分け部分により、色ごとの型をとつてゆく。一つの羽子板には、頬や手の部分の白、輪郭線の濃茶、着物の緑・赤・黄・青・金、そして頬紅の牡丹など、約八通りの色を用いているが、それら各色の色

型を載せ一つ／＼刷り分けて絵柄が浮かびあがる。その型とは木枠に網を張り、エヌゾール、重クロム酸などの薬品で化学的処理を施し、網目の密度で模様が作られたものである。普通、シルクスクリーンと呼ばれている。ラッカーにより絵が刷り終ると、尿素樹脂液を塗り、表面を固くすると共に艶を出し、雨に濡れても色落ちがしないよう仕上げる。

山本さんのところで作っている羽子板は、板の大きさ尺三、尺二、尺一、一尺、それに戦後の一時期、ピンポンの流行で人気が出た、ラケットに似た丸型のもの大小である。それぞれの大きさには五種類の絵柄を用意している。三十の絵模様になるが、朴の木



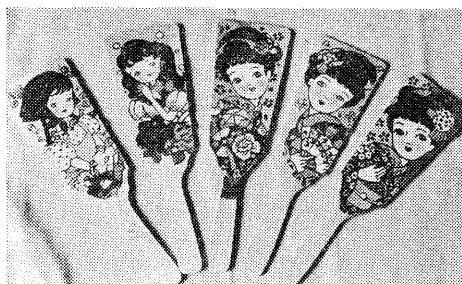
▲ ラッカーアイントによる  
スクリーン印刷

の他に、やや値のはる桐の羽子板も作っている。桐は尺三と尺二。そこで合計四十種類の絵模様となる。裏絵は大きさが一日でわかるよう尺三には桜、尺二には梅、尺一には兎、一尺は犬の絵を刷っている。

値段は尺二を例にとると、朴の羽子板で卸が百円から百二十円、小売で三倍の三百円から三百五十円である。桐製は卸値が三百円、小売値が八百円から九百円となる。朴の三倍はする桐の羽子板は売れゆきが悪く、門屋でも多くは買つてゆかないといふ。

しかし朴の羽子板と桐の羽子板と手にもつてみると、桐の材は柔かく、しつとり手に馴染み軽やかである。思わず羽子突き気分に誘われる。

朴は現代風俗の洋服を着た少女二種と、和装の少女三種の図案となつていて、それに対し桐は、桐材の風合



▲ 尺三の朴の羽子板

にふさわしく狂言物を題材とした童女が写されていた。背景に松が枝、波をあしらい、蛤模様の衣裳に身を包み、桶をもつ潮汲。桜吹雪のなか紅白の垂幕を背に、中啓の扇を手にする道成寺。柳がしなだれ、鳥帽子姿が鼓を打つ朝妻。藤の枝を肩にかけ、赤い笠をかぶる藤娘。もう一つ、これは男の子に向けたもので巨人軍の選手がバットを構えている。左に構えているから王選手であろうか。「巨人はこの頑弱いからな」と山本さんは笑つた。

さてここにもう一つ伝えることがある。山本久光さんは裏絵師として、その道で知られた方である。押絵羽子板の裏絵は、桐の継目をかくす巧みな一筆書きによつている。羽子板は一枚の桐板では反がくる。必ず何枚かの板を継いでいる。裏絵師は、継目を継目と見せないよう竹などを水墨でスッーと描いたりする。松竹梅が一番多いそうだが、表の狂言との取合で筆を入れてゆく。

山本さんは埼玉で生れ、東京の根岸で育つ。小学校の時から絵が好きで、学校を出て蒔絵師を志す。櫛、笄、盆、重箱などを手がけたが、絵の心得が大事と日本画を習い始める。師は関啓畠氏で荒木十畠氏の弟子という。十畠氏の画筋は山本さんの中にも流れていった。「啓畠先生は四十代の若さで惜しくも亡くなつたけど、絵の上手な人だったよ。」と語る。先生の描いてくれた手本の画帖は三冊あったそつだが、戦争で焼き一冊だけが残つたという。

その貴重な一冊を取り出して見せてくれた。山本さんはいとおしむように一つ一つの絵を開ける。竹、梅、鳥、翡翠、鶴頭の花……。するどく、ゆたかで、氣品があつた。この手本を真似、家で一所懸命描いてゆき、先生に週一回の指導を受けたそうだ。その

当時、日本画を習うものは四君子の附立つけだてから始めた。余事ながら附立とは下図を用いず、また輪郭線を描かず、サッと一筆描きすることをいう。即ち没骨である。手本を見ながら勢をこめて附立て描く、基礎を踏まえての修業をすること十年。山本さんは「今の人々は、日本画やる人でも附立をやらないからねえ。名のある人でも色紙や扉面にサッと描ける人少ないねえ」と言う。

関東大震災前のこと、蒔絵の仕事は夏、暇になるため、小田原の木工屋から来てくれないかと誘われ、出向いた。そこでは焼絵の羽子板を作っていた。元は電車、汽車の挽物玩具を作っていたらしいが、どこからか注文を取り、当時流行の焼絵羽子板を手がけたものとみえる。そして小田原で関東大震災に会う。十八の歳のことだ。歩いて根岸の家にたどり着くと家は燃えていた。震災後のドサクサでは、蒔絵など商売にならず、日暮里で絵師募集の貼紙をみた時とびこむ。仕事は焼絵の羽子板だった。あつ、これなら出来ると絵筆を奮う。一日二十五銭というのが腕があるので、一週間して一日一円になったという。絵師を求めた羽子板屋

とは伴野氏ということである。震災後も日本画を続け、十畠氏の弟子一門による読画会の展覧会に出品したりした。しかし、だんだんと羽子板の世界に行っちゃったんだなあと語る。羽子板とは因縁があつたということだろうか。

桜井春山らの、これはという押絵羽子板には、山本さんが裏絵をつけってきた。狂言の張りのある役者の顔が描ける人達も、一笔描きの附立はいけないようだ。押絵羽子板を裏から支え、心憎いことをしてきながら、山本さんはいふ。「おもぢやの小さいのをやつてる方が暢気でいいよ」あつさりしたものだ。夫婦で力を合わせ、簡便な方法で、たくさん、きれいなものを、あくまで安く作って満足している。床の軸には、大根の墨絵に添えて自作の句が詠まれていた。

色白で

ちょっぴり辛きの

甘さかな

○

現在、かちかち羽子板にはこの他、茨城県水戸の焼絵羽子板、栃木県佐野の水性絵具による刷絵羽子板、そして埼玉県川越の厚

紙に印刷したものを貼った絵貼羽子板の三種がある。『羽子板』で紹介されていた当時のものは、中原淳一の絵に似せたものが多く、それらと比べ今の羽子板は、少女がより幼い顔になっていることに気づかされる。

ところで羽子板には、大人の趣向に適う押絵羽子板と、子どもがきれいと自ら選ぶおもちゃの羽子板がある。技巧を忍ばせ作りなした、渋い品のある押絵羽子板は、大人の目はひき寄せても、子どもは、目の大きな、色鮮かに色どられた安手の羽子板に心がそられる。子どもの世界を見渡すと、羽子板に限らず、他

のおもちゃ、絵本、洋服など、原色の派手な色彩がたっぷりと使われているのに気づかされる。淡い中間色ではなく、どぎついとさえ感しさせるそれら子ども用の品々は、品位のない、俗悪なものとして、大人たちの眉をひそませる。  
けれどもわたしの子どもの頃を思い返してみると、赤色や桃色、そして牡丹色こそは、夢の世界にひきこまれるようなうつくしい色であった。幼いその日に、リリアンの色糸を宝物といつくしんだものは多からう。リリアンに限らずビーズ、千代紙など、きれいなものをこつそり集め、秘めやかにうち眺め魅されてい

た。そこには確かに、子どもの美しさの感覚が働いていたにちがいないのだ。

電車を二駅乗ると、もう遠いところに来てしまったと感じ、夕方暗くなるとその日の出来事は彼方うしろの時の淵に溶けていった。何という小さな世界だったのだろう。クレオンは十二色もあれば、この世のもの全てを色づけするのに十分であり、二十四色のクレオンなどもてあました。子どもは茫茫たる世界を前に、鮮かな刺戟でのみ紡がれた、感覚のシェマとともに呼べるもの内にもついているのだろうか。そして大人からはいい顔をされないとしても、色鮮かな原色こそはそのシェマの大切な繊り糸ではないかと思われる。

年末の羽子板市をまわり、押絵羽子板は徒らに華やかなものが多くなりすぎているように思われた。おさえのきいた簡雅の趣のものが甚だ少ない。もしこういったものがよく売れるならば、大人の側の好尚に変化が生じているのであろうか。子どもの世界と大人の世界がきつちりと羽子板にあり続けることを望みたい。最後に、子どもの美しさの感覚の因柄を長年にわたり羽子板に写し出してくれた山本さんはじめ、かちかち羽子板製作の皆様に、わたしの子ども時代の懐しさをこめて、ここに感謝の気持を表したい。

# 思 い だ す こ と・考 え る こ と

中 村 妙 子

“子ども時代の読書の思い出、現在の翻訳の仕事の苦勞話やエピソード”というご依頼である。とりとめもなく綴ることになるが、どうか、お許しいただきたいと思う。

わたしが最初に出会った本、それはペーテー・パンの絵本だった。知っている本屋さんに母と寄ったときいただけなもの。絵も、文も、さっぱり覚えていないが、横に長い黒い表紙だったような気がする。ティンカー・ベル、ティンカー・ベルと轉っていた記憶があるから、母がTの発音を教えこんでくれたのかもしれない——母は忙しい人で、英語を教わった記憶は以後まったくないのだけれど。

とにかくわたしは学齢前の一時期、明けても暮れてもペーター・パンへだったようだ。

先ごろ、こんな話を聞いた。赤ちゃんを抱いたお父さんと小さなお姉ちゃんが向い合せにソファに坐つて、ふざけてクッションを投げあつていた。クッションが空を切るたびに赤ちゃんはうれしがつてキャッキャッとお父さんの膝で跳びはねていたが、そのうちにクッションと自分がいつしょになってしまつたらしく、いきなり前へピョンと跳びだし、びっくりしたお父さんが押える間もなく、床に落ちてワーンと泣いた。

その話を聞いて思わず笑いながら、わたしはベビーテーパンのことと思いだしていた。あのころ、わたしは四つ、五つ、でもピーター・ウェンデラーは、空を飛べても、自分は飛べないということをはつきり知っていたと思う。自分が飛べないからこそ、あの物語に夢中になつたのだろうか。

カタカナを覚え、さらにひらがなが読めるようになると、わたしの世界はぐーんと広がった。当時は子どもの本はいまほど豊富でなかつたし、そうちう買つてももらえないかったから、題名で歯の立ちそうなものの見当をつけたは父の書棚から引つぱりだした。あるとき、横書きのカタカナで「ヘン・パン」という本を見つけた。面白そうだと手に取つたが、開いてみるとわけのわからない文言を連ねた雑誌風のもの。後でわかつたのだが、これは英語風にカタカナを左から書いた題を、わたしが日本風に右から読んでいたのである。つまり小冊子の合本だったのだ。

わたしの愛読書はおいしいものの出でくる話。それも山海の珍味などではなく、ごく普通の食べものをことこまかに描写した本がこたえられなかつた。たとえば「家なき子」。

小学校にはいったころ、まず小学生全集で読んで、物語そのものもさることながら、幼い主人公のために、養母が乏しい家計をやりくりしてパン・ケーキを焼いてくれるくだりに魅せられた。ジューッと鍋の上でバターが溶け、パン・ケーキの上つかわがきつね色になつたころを見計らつて鍋の縁をぽんと叩くと、空中に舞いあがり、焼けた方を上にして落ちてくる。と、香ばしい匂いが台所にみなぎり……

：「ああ、おいしそうだ」と繰り返し読んだ。

小学校の三、四年ごろ、新しい読書の世界が開けた。世界大衆文学全集という海老茶色のクロース張りの表紙入りの紙カバーをかけた小型の本が家の書棚に並びだしたのである。総ルビつきだから、小学校の低学年でも十分読める。まず、小学生全集でお馴染みの本から取りついた。

菊池幽芳訳の「家なき子」もその一つであつた。

子どもといふものは最初の出会いでイメージを作りあげるから、往往にして依怙ひいきをする。小学生全集の「家なき子」はかいづまんだごく簡略なものだったと思うのに、わたしにはたいそうつかしく、ずっとくわしくはあるが、主人公からして民という日本名前にした大衆文学全集の「家なき子」にあまり親しめなかつた。第一、あのお

気に入りのパン・ケーキが、ここでは銅鑼焼となっていた。

小学生時代のわたしは餡粉が苦手で、銅鑼焼も中の餡をすつかり取つてから食べるというふうだったから、それこそげんなり、たいへんな幻滅を感じた。ルバーブ・タルト、いちごタルトという、魅力的な音の、何やらおいしそうなお菓子も蒸餅となっていた！

しかし世界大衆文学全集そのものは、小さなわたしにとつていいわば宝庫であった。読みやすいし、どれもはなはだ波瀾に富んでいた。わたしはよく扁桃腺を腫らす子だったが、熱がさがりはじめると、「本なんて読まずに寝ていないと早く治らない」と叱る母が近くにいないのを確かめた上で、丈の高い本棚に足を掛けてのぼり、三冊ぐらいを取つては敷布団の下に押しこんでつぎつぎに読んだ。ものによつてはかなりの抄訳で、『読みやすく、面白く』という編集方針だったのではないだろうか。訳者も小説家が多いようだった。いま思うと、あの小さな全集を読んでいたころはわたしの劇画時代だったのだろう。きりなく思い出せる題名のいくつかを拾つてみよう。同じく『言葉の劇画』を楽しめた読者もいらっしゃるかも知れないから。

まず探偵もの、冒險ものはルパンの（813）、ホーム

ズの『四人の署名』、『黒星』、『ルコック探偵』、『ソーンダイク博士』、『海底二万マイル』、『紅はこべ』、『宝島』。

ロマンスは『椿姫』、『クオヴァディス』、『マノン・レスコオ』、『スカラムッシュ』、『ゼンダ城の虜』、『ジェイン・エア』。

怪奇ものは『聊齋志異』、『ボオ傑作集』。

児童ものは『小公子・小公女』、ラムの『沙翁傑作集』、ああ、きりがない……。

ズーデルマンの『フラウ・ゾルグ』、誰の作か、『善良な男』という話は、『テス』などよりも、大人の世界の怖さを感じさせた。

わたしは世に翻案ものというジャンルがあることを知らなかつたから、少年俱楽部に『少年連盟島』という題で『十五少年』が載つてたり、少女俱楽部に『緑の天使』という題で『オリヴィア・トゥイスト』が連載されたりする、どうして翻訳と断らないのだろうとひとりで憤慨したものだ。

新しい言葉にぶつかつたときの記憶も鮮明だ。意味を訊きたただす暇はもとより、辞書など見る気もなく、およその見当をつけて先へ先へと読んでいくのだから、はてなと思

つて、前後の文章といっしょに胸に畳んでおく。たとえば「さくばらん」は武林無想庵訳の「巴里の秘密」の中で、「図星」は金田鬼一訳の岩波文庫の「グリム童話集」で、アラバスターとか、薔薇水そらびすいといった異国的な言葉は「千夜一夜」で、と一々、はつきり覚えている。

北欧の雰囲気らしいものにふれたのは菊池寛訳のケインの「放蕩息子」がビヨルンソンの「シンネーヴェ」などより早く、ユーモアをそれと意識したのは佐々木邦訳の「トム・ソーサー」においてであった。わたしはいつも訳者の名前を原作者と並べて頭にいれていた。

翻訳の言葉そのものを意識したのは坪内逍遙訳によつてである。といふとそらそうだが、これはレコードのおかげなのだ。あるとき、逍遙が自分の訳を自分で朗誦している一组のレコードを、父が買つてきた。紺の布を貼つたたどうにはいつた「ハムレット」第三幕第一場と、「ヴェニスの商人」法廷の場。家族のはかのみんなが飽きたころでも面白がつて何度もかけたから、いまだも大部分、暗記している。一度くらべたが、逍遙全集のせりふとは少々違うようだつた。

わたしは「沙翁傑作集」を読んだあと、シェクスピアの作品のくわしい筋を知りたいばかりに、逍遙全集を読んでいたけれど、「ひどく」を「いつち」といつたりする逍遙の文はとても取りつきにくいものに思われたらしい。それがレコードを聞いて、なるほど、こういうふうに読むのかと子ども心に思った。

「ハムレット」は「世にある。世にあらぬ。それが疑問じや」の独白で始まり、オフィーリアが出てくるとまったく歌舞伎調になる（もちろん当時のわたしはそんなことは知るよしもなかつたが）。「ご前さま、このじゅうはいかが、わたらせられます」とあれこれ話しかけるが、けっきょくハムレットは「尼寺へ行きや・尼になりや。さらばじゃ！」と血を吐くような声を残して、（たぶん花道を）去つて行く。と、残されたオフィーリアの愁嘆場。「なまなか天の楽のような、ご誓言の蜜を吸うたばかりに、世の中の女子じゅうでいいち味氣ない身となつたわ……」よよと泣きくずれるのである。

「ヴェニスの商人」法廷の場の方では、「ああ、賢明なる裁判官さま、ダニエルさま、ダニエルさまの再来じや！」と強欲そうな声を張りあげての熱演。牧師の子として、獅

子の檻にいられたダニエルは知つていても、旧約外典までは知らなかつたわたしは、ソロモンならわかるけど、ダニエルがどうして裁判官のかしらと考えながら聞いていた。

読むものがなくなると何かの文庫にはいついた黒岩涙香のものを買つてきたが、ここでも登場人物の名はすっかり日本名前。しかし「家なき子」の場合と違つて、初対面だから、筋の面白さにひかれてとくに違和感も感じなかつた。世界大衆文学全集にはいついた「巣窟王」（モンテ・クリスト伯）も涙香訳だつたのかもしれない。エドモン・ダンテスは団友太郎、ダンクルールは段倉、ヴィルフォールは蛭峰と、悪人は悪人のような音と字になつているのも愉快だつた。

そのたぐいの本で私の目にふれた最後のものは、女学校にはいつから数冊買つてもらつたディケンズ物語全集。松本泰・松本泰子訳でオリヴァー・トワイストが織部捨造、マーティン・チャズルウッドが千鶴井長寿丸となつていた。

戦後、やたらとカタカナの多い文章が目立つようになつ

たことを考へると、当時は外国は絶じてまだ遠かつたのであろう。

さて翻訳の仕事をするようになつて、幼いころから慣れ親しんできた翻訳ものの影響が少なからず残つてることを感じる。わたしは自分の文を読みかえすとき、心の中で声を出して読む。自分の文というものは体臭とか、癖のよう自然に身についているのか、悪文でも、目には、通りがいい。声に出して読むことで欠点に気づくのは、いささかでも客観的に読めるからかもしれない。もししかしたらそれは、目で見る文章、耳で聞く文章というものの違いに遙遙のレコードで気がついたからだろうか。

読者が子どもでも、あだやおろそかに考へてはいけないということも、自分の経験から銘記している。小さいころ、読んで「おかしいな」と思った文のほんとうの意味に、大人になつてから、「ああ、そうだつたのか」と気づくことがままあつたからだ。

「あしながらおじさん」は世界大衆文学全集では「蚊とんぼスマス」となつていたが、その中のジエルーシャの言葉に「孤児院育ちのわたしは「娘大学」を知らないけれど、

ほかの友だちはみんな読んでいるらしいのでさうそく買いました。だからいまではみんながお漬物の話を聞いてもすぐわかるのよ」といった文章があつた。『娘大学』——はて、何のことだろうとふしぎに思つたが、ずっと後になつて、娘大学とはヘリトル・ウイメンのことで、お漬物とはエイミーが教室でライムの砂糖漬を回して先生に罰せられるくだりのことだったのだと悟つた。

また、小学校にはいつから読んだ小学生全集だつたか、金の星社のものだつたかのピーターパンの中に、『春のお洗濯』という言葉が出てきて、「妖精の国では洗濯は春にならないとしないのかしら」という疑問をもつたが、これは春の大掃除のことであつた。翻訳上の間違いを「記憶にございません」といえないのはこの商売の辛いところである。証拠はいつも歴然としているのだから。間違えたときには（人間、誰でも過ちは犯すのです）せめても重版までには直したいし、間違いでなくとも、疑問点ははつきりさせておきたい。こうしたアフターケアの作業の一例をこの『児童の教育』を引合いで述べさせていただきて、場所をさぎの一文を結ぼうと思う。

わたくしが数年前に、新潮社から出した訳書に、カニング

著の『スマイラー少年の旅』という三部作がある。それがこの秋、偕成社文庫に納められることになり、漢字を減らしたり、ルビをつけたりする作業を偕成社の編集の方がして下さつた。それで訳書を久しぶりに取りだしして通読していたおりから、『児童の教育』一〇号を読んで、ヘルソーの夢で海老沢先生のふれていらっしゃった童謡の一つにはつとしたのである。

リチャード・チャイスの編集した『昔の歌と歌唱遊戯』におさめられているといふ。『ロディーおばさん』に言つといで、——は『スマイラー少年の旅』の第一巻『チーターの草原』の末尾近くに出てくる歌である。わたしはその一節を左のように訳している。

ロディーおばさんにいとくれ

灰色雁は死んだとね

ロディーおばさんにいとくれ。

羽根の蒲団を作ろうと

手塩にかけて育てたが

灰色雁は死んだとさ……

「第Ⅲの saving はとておぐとじう意味だが、口調上、

い。しかし鶯鳥でないと歌そのものはやはり落ちつきがない。

これをはじめ灰色鶯鳥と訳した。文脈からいって、正しいと思つたからだ。ところが第二巻目の原書が届いて読んでみると gray goose はこゝではまったくの野鳥、しかも渡り鳥らしい。しかも二巻の題名そのものが The Flight of the Gray Goose なのだ。するとあの歌はおそらく第一部の導入の意味もあって挿入されたのか……というわけで校正の段階で第二部に揃えて一巻目も“灰色雁”とした。ただどうも貌然としない思いが残つた。

ヘルソーの夢を拝読して、このことはやっぱり確かめておく必要があると考え、日本野鳥の会に所属する知人に電話で訊いた。その結果、次のことがわかつたのである。

日本の家禽のいわゆる鶯鳥はサカツラガソンという種類が長い間に飼い慣らされたものであるが、歐米の家禽の goose は主としてハイイロガソンが家禽化したものである。つまり日本ではガソンとガチヨウと二通りにいい分けるものが、歐米ではとともに goose、しかも gray goose のだ。したがつて第一巻目は日本語でいえば鶯鳥なのだろうけれど、第二巻目との関連を考えれば灰色雁とせざるを得な

とまあ、アフタケアの機会を与えて下さったことだつて、海老沢先生に感謝申しあげるとともに、おまんらの日本語をかこつた次第である。

翻訳をやつしていくよしきに感じるのは、印刷になつてしまつてからでも、題材に関連のあること、訳語に関することが本、新聞、雑誌、テレビなどで、ちょいちょい目にふれ、耳に達することである。幾度、わたしは誤訳をそうしたありがたいチャンスによって土壤場で訂正することができたか知らない。自分に不得手な分野を承知していると、また怪しかつた訳語について目を光らせ、耳を澄ましてみると、多くの場合、しばらくたつてから「なるほど、ここのはこういう意味か」と納得することが多い。

たかが子どもの翻訳と馬鹿にすることなかれ。子どもの翻訳はむずかしい。多くのことが前提としていわす語らず、理解されているだけ、それだけむずかしいのである。

(翻訳家)

# フレーベルの第一恩物を原点とした 玩具と乳児の発達段階とのかかわり合いの一考察

川田芳子

大磯喜久子

永吉和子

竹中良子

前川富美子

## そのI

また、彼は神のように創造する能力の芽生えは、生れたばかりの子どもに与えられているとし、球によって外的内的刺激を受け、成長発達すると教えている。

私たちは「フレーベルの第一恩物」である「六球」を保育とり入れ、まりの特性を生かした遊びを主体にして、乳児の心身の発達過程の反応を観察してみた。

## 方法・反応

フレーベルは、子どもに与える最初の玩具は最も単純なもので且つ最も多様性を含むものであり、基本的なものの中に創造性を欠くことのできない要素を含んでいる形態として球形を選んでいた。

赤、黄、青の三色のひもつきとひもなしまりを使用し、対象は

生後四十五日から満一歳二ヶ月児とした。

◎左右上下に動かす（ひもつきまり）

まりを静止させた状態でひもを左右に移動させると、生後一、二ヶ月頃の乳児はまりの方へ視線を向け、わずか数秒間であるが動きを目で追い、時にはかすかなほほえみをうかべる姿がみられる。

「一、三ヶ月頃には語りかける保育者の顔とまりを交互に眺め、

物体の存在を確かめているようであり、まりをさげて手に触れさせと一瞬「ピクッ」と反射的に手を動かしている。三ヶ月過ぎる頃には盛んに手足を動かし、物体の確認を更に深めたい気持を全身で表現している。

五ヶ月頃にはまりから視線を離さず、近づいてくることを期待するかの如く全指を広げ、触れるによつて満足感を充たし、動くまゝ手足を動かして追い求める姿の中に、時間的、空間的観念の芽生えを感じさせる。

また、まりからひもに視線を移し、更にひもを持つてゐる保育者を確認するかのように笑顔がみられ、逆に保育者からひも、まゝりへと移す場合もあり、殆どの乳児がこの時期に同じ反応を示している。

ここに乳児と保育者を結びつけるまりであることが明確に表現

されている。

座つてゐる乳児の前に、まりを上から落すように床につけると、何度も見せているうちに落ちるのを期待して視線を上にあげ「ドスン」という言葉に声をたてて笑つてゐる姿がみられ、ここにも時間的感覚としてのまりをとらえてゐるようである。

やがて、這う時期になると自分で動かそうとする活動が目覚め、まりを出すとすぐ寄つてくるようになる。

◎左右前後にゆり動かす（ひもつき）

この遊びの反応は四ヶ月頃までは先に述べた「動かす」と殆んど変わらない。

五ヶ月頃になると、ゆれるまりに手をのばして触れようとするがうまく握れず、一段と大ゆれしたり、回転したりし、叩くようになりを追い、自分で動かす意図的行為がみられ、自発活動の一  
片がうかがわれる。

また、両手ではさむように握つたり、引っぱつたり、口に持つていき、触覚を通してまりの性質を感知しているようである。

八ヶ月頃には、動くまゝをつかまえ、保育者がかるくひもを引き上げると、最初はすりぬけていたが、次第に手から逃がさないようひものついている部分を握ることをおぼえ、強く引いてもはずれず、ひもを上げ下げるとき、乳児の腕が上下し、保育者と

の強いつながりを確認しているかの如く笑顔をみせ、活動性を満足させる大好きな遊びである。

◎上下に振る（ひもつきまり）

この遊びは、まりの動きが速くなり、リズミカルな動きをする。

目の高さでまりを振ると、動きに合わせて小ささみに首を振つたり、両手を羽ばたくように動かしたり、身体を左右にゆすつたり、遊戯への芽生えがみられる。

そして保育者が持っているひもに興味を示し、いっしょに振る真似をし、持たせるとてたらめな振り方をするが、自分もまりと一緒にになって身体で拍子をとっている。

一歳頃には、保育者の歌や語りかけといっしょに上手に振るようになり、模倣遊びとしてのまりの与え方が考えられる。

蝶々、犬、かえる、等の生き物の動きをすることによって乳児の目は輝やき、実物が存在するかのように好奇心に満ちた表情をみせて いる。

◎空中、床でまわす（ひもつきまり）

この遊びは、更に速度が早くなり、少し離れてみると大きい円を描いており、驚きや不可思議な表情でしばらくの間身動きもせず、まりの動きに見入っており、空間的、美的感覚としてのまり

を見ているようである。

◎床で左右にゆする・ひっぱる（ひもつき）

まりの動きは生物としての動きが感じられ這一時期に興味をもつ遊びである。

目の前でまりを引っぱると、手足に力を入れて取ろうとする自発活動がみられ、ひもを引っぱることによって這い這いへの意欲を必然的に持たせることが可能になり、まりをつかまると離さないようにかかえこみ、満足感を味わっている。

◎ふり上げてたたく（ひもつきまり）

保育者と向かい合つてまりのひもを持ち、ふり上げて模倣しようとすると、自分の体にまりがはね返り、反動で反対方向に回転する肩たたきの遊びを自ら考えてしている。

その他、ひもが輪になつていることに気付き、両指を引っかけて振るとまりが回転する遊びや、輪の中に腕を通したり、頭を入れようとする遊びを乳児自身が発見し、無限の可能性を感じさせる場面が遊びの中でしばしば見られる。

◎乳児が次第に成長発達し、自分で物に触れたり取りに行こうとする身体運動が盛んになると、その発達を助長するための遊びとして、ひもなししまりが適してくる。

◎握る・たたく・丸める（ひもなし）

乳児の前に三色のまりを置くと、赤に視線がいき、握って遊ぶのは手近にあるまりを選んでいる。

そして口にくわえたり、床にたたきつけたりしてまりの形や性質を感じしている。

一歳頃には二個のまりを持つて両ほほに当てたり、打ち合わせたりし、保育者がもう一個のまりを出すと片方のまりを口にくわえて三個目を持ったり、両足でかかえこむようなしぐさがみられ、数的観念の芽生えを感じさせる。

また、色にも関心を持ち、保育者と同じ色のまりを選んだり、ころがっていったまりを追いかけて保育者のところへ持ってくるようになる。

やがては自分で目的の方向に投げるようになり、歩行完成の時期には自由に拾ったり、投げたりの自発活動がみられる。

このひもなしまりの「ころがす・投げる」の遊びは「小ボル」として次のそのⅡで紹介する。

## 結果・考察

以上第一恩物の遊びの一例を紹介したが、まりの遊びの多様性

が測り知れないほどあることが推察できる。

フレーベルは赤いまりを毎日くり返して見せて いるうちに、動

くものに興味を感じ手をのばして触れようと努力し、触れば握るうとして握って放せば動き、自分の力でまりを動かすようになり、反復しているうちに触覚を通してその物体を感知するようになると述べている。

私たちは、まりの遊びを通して確認し、第一恩物が球形であることの意義が理解され、即ち自然界と人間の理想としての球形であり、生れて間もない乳児が母親の胸からやがて離れて自立していく過程は、ひもつきまりからひもなしまりへと移行していく過程の中に明らかにうかがわれる。

親と子を結ぶ最初の玩具がまりであるならば、人間と宇宙、つまり自然とのつながりのひもであり、宇宙の創造者である神と人間を結ぶひもではないだろうか。

参考文献 荘司雅子著『フレーベルの教育学』

## そのⅡ

### 目的

私たちの乳児保育の中で、欠くことのできない素材である玩具

の大部分が大小の球を形どっていることに着眼し、第一恩物を基本にした遊びを取り入れ、玩具とのかかわり合いの反応を観察し、乳児の心身の発達を助長する保育を習得したいと思う。

## 方法・反応

保育者と乳児の毎日のふれ合いの保育の中で観察し、対象は二ヶ月児より満一歳二ヶ月児とした。

生後一ヶ月～二ヶ月　一日の大半を眠つてすごし、目覚めている時に、音、明るさ、動くものにかすかに反応を示し、保育者が笑顔で語りかけると、じっと見てほほえむ。  
抱き上げると保育者の胸に頬を寄せ、母親の乳房をまさぐるように口でさがし求めるしぐさをする。

この時、人工乳児はこのしぐさが少ないのでマザーリングの必要を感じ、保育者の頬や手をもつて愛撫しなければならないと思う。即ち、球のやわらかさを肌に感じさせるようとする。  
生後三ヶ月～四ヶ月　指いやぶりや、自分の指を広げたり、握ったりして眺め、身近にあるものに触れようとしている。

この時期は、オルゴールメリーような吊り玩具を好み、やわらかい音や、暖かさを感じさせる明るい色に目を向け、笑ったり、哺語を発して手や足を動かしている姿が見られる。また、指

しゃぶりの時期なので、おしゃぶりや、ガラガラが適しており、持たせると口に持つていこうとする（吸うという条件反射）その上、人がいるという意識が出てくるので保育者が側にくと、嬉しそうに手足をばたつかせ、抱き上げると安心したような表情を示し、この感情が充分に満たされることによって、指しゃぶりの時期を脱皮するよう配慮しなければならないと思う。

ここにも球のやわらかさとの関連があると思う。

生後四ヶ月～五ヶ月　この頃になると上体がしつかりし、腹這いや両腕で支えて頭を起こしている。

立体感や距離感も出てきて、保育者がガラガラを振ると、じつと見つめ、自分から手をのばして触れようとする。

とどかないと怒りの表情で泣き、側へ持っていくと泣き止み、感情の表現が少しずつ多様化していくようである。

起き上りこぼしを自分で動かし、音を楽しんでいるが、力が入り過ぎて大ゆれになると、驚いたように泣く姿もみられ、保育者は不快を取りのぞくよう少しの間ひざに抱いたり、玩具を納得するまで握らせたりして、乳児の要求を満たすようにしたい。

生後六ヶ月～七ヶ月　少しの間座ることができ、保育者が離れると不安そうに目で追い、人見知りが始まること。

この時期に天井から吊したビーチボールを与えると、腹這いや

仰向けになつて、叩いたり、蹴つたり、両足を持ち上げて抱えこむようにし、球としての感触を存分に楽しんでいる場面がみられる。

この人見知りする不安定な時期に、心のふれ合いを大切にし、強く抱きしめることによつて相互の信頼感が生れてくるのではないか。

また、少し遠くの物も目に入るようになり、移動玩具を動かすと目で追い、身体を一時静止させて玩具に集中し、興味への持続時間が長くなつてくる。

しかし必要以上の刺激を与えることによつて感情の高ぶりが見られ情緒安定を阻害する恐れがある。

乳児には落付いたふんいきの中で生活するよう心がけなければならないと思う。

生後八ヶ月～九ヶ月　這うことが自由になり、一人でお座りができる。また簡単な模倣もできる。

この時期は、物の形を知らせる玩具として、ボール、積木等がある。

保育者が積木を重ねて見せると、触れてこわしていたが、やがて上の積木を取つてみたり自分で重ねようとする姿がみられ、知的発達の芽生えを感じさせる。

その他、生活用玩具を好み、保育者がコップで飲む動作をしながら言葉かけをすると、一緒に動作をして嬉しそうに何度も要求をし、との接触を進んで求めるようになる。

球形から円筒、立方体へと遊びの中で、第二恩物の形体が自然に取り入れられるよう配慮し、遊びを充分に満たすよう心がけたい。

生後十ヶ月～十二ヶ月　つかまり立ちからつた歩きができる。一期期、玩具から離れて一人で歩行練習に熱中している姿がみられる。保育者はその期間を見守り、歩行完成への到達を助長するような遊びを考えたい。

同時に言葉の理解と意味のある単語を発するようになり、破壊的であった遊びから思考力が生れ、構成しようとする知能の芽生えが明確になつてくるようである。

天井から吊したビーチボールはこの時期にも適しており、保育者の肩につかまって片手で叩いたり、両手で抱えこむような動作を繰り返している。

また玩具の中から組み合わせられるものを自分で選び、得意顔で見せ、保育者の誉め言葉を待つて。また組み合わさらないものも試してみようとし、笑いをそそる場面が多く見られ、知的発達を促す玩具を与えたいたい。

生後十三ヶ月～十四ヶ月　一人歩きができる、歩行がしっかりとれてくると、小ボールを自分で投げては拾いに行き、目的をもって遊ぶようになる。

歩き始めた頃の乳児が立っているところへ大・中・小のボールをころがすと小ボールを拾っている。すでに大きさの比較ができるおり、小ボールは握りやすく、バランスをとる為に支障がないことを乳児自身が把握している。歩行が完成すると、吊りピーチボールをはずし、保育者ところがしたり、投げ合ったり、一人で抱えて歩いたりする。

他の子が自分と違う色のボールを持つていて、自分のを捨てて取り上げようとする。また、交換してほしい意志表示をする。

ここに、保育者の仲介なしで、子ども同志のふれ合いがみられ、友だち意識を感じさせる場面である。

また、全身を使って遊ぶことのできる大型ブロックも喜び、同色、同形のブロックをより分けたり、友だちと同じ物を欲しがり、取り合になる姿もみられ、一人遊びから集団遊びへの意識が芽生え、危険のないよう見守る姿勢が保育者として大切であると思う。

以上の遊びは恩物を原点とした遊びの応用であるが、最初の皮膚感覚から目、耳、口、手足、身体を動かす全身遊びに発展し、更に活動範囲が広がって歩行完成に到達する過程が遊びを通して感じられる。

知的発達においても、明るさから色感、感触から形、数、振つたり投げたりすることによって方向、重さを感知できるよう導くことができる。

しかし、既成玩具は遊びが制限され、発達段階に適さないと危険をともない破壊衝動をおこす玩具になってしまふ場合があるのでも、保育者は取捨選択し、手作り玩具を考案し、発達に即した玩具や遊びを取り入れなければならないと思う。

恩物は、発達に応じた無限の遊びが可能であり、自発性を促し、身心発達の助成をなしている。

私たちは、玩具の原点である第一恩物を再確認し、乳児の中に眠っている無限の能力を導き出すべく努力が保育者としての使命だと思う。

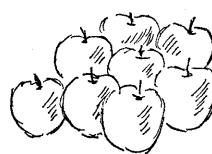
(社会福祉法人イエス団 坂出育愛館)

## 結果・考察

# 現職研究レポート

## その三 A幼稚園の場合

太田留美



千葉市轟町にあるA幼稚園の公開観察日は昨年の二月十三日であった。都心から二時間足らず電車に乗れば、これ程まで街のたたずまいも変つてくるのかと驚きながら、A幼稚園を訪ねた。門を入ると松の木があり、黒く肥えた昔ながらの地面があつて、自然で素朴な雰囲気が漂っていた。

この日、観察者たちが眼にしたものは、年長児は年長児らしく育ち、四歳児は四歳児さながらに成長して、それぞれの遊びを遊んでいる子ども達の姿であった。

このように落ち着いた子ども達の遊び姿が見られるのも、M先

生の話によると「自由な形態に生活をえていくのに、保育觀を揺さぶられ、揺さぶられしながら、思いきって形を崩し、模索しながら歩んできて、やつと二年前から、子ども達も先生方もいい感じで生活できるようになった」と言うことである。

そうしたいい感じの保育の中で、子どもと保育者の出会いがうまくいっていないのか、関わり方に不安を抱かせられる子どもがいるという事が問題として取り上げられた。

そこで、K君とU君に焦点があてられることになった。

観察者の眼にも、K君は動きが激しいために、ひときわ目立つ

た子であり、反対に、U君は動きが少ないために、気になる存在であった。

二月二十日、現職研ゼミにおいて、U君とK君のケース報告をもとに話し合いが行なわれた。まず、U君との関わり方について、担任のT先生の報告を掲げよう。

### ■ U君のこと

U君は表情も乏しく、保育者との会話もほとんどない。友達の遊びを遠くから見ていて誘われると逃げ出してしまう。

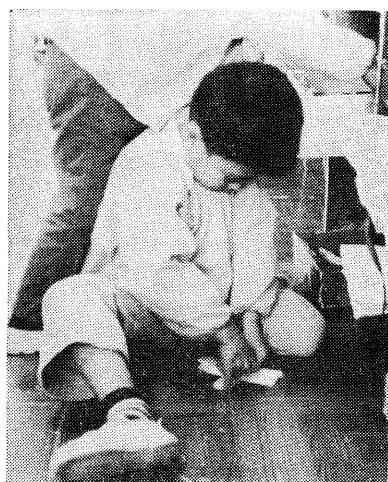
そのような園生活が、本当に楽しいのかなどいつも心配になる子である。保育者として、どう接してあげようか。もっと楽しそうにさせたい。もっと活発になつてほしいという思いをいつも抱いてきた。反面、全体で動くような時、礼拝への参加、お弁当、帰りのしたくなどの時は、皆と上手に出来るので、ついU君の事を見落してしまいがちであった。

最近、U君が仲良しの友達と飛行機づくりに夢中になり、U君の新しい段階が感じられる様になつてきたが、それをどう受け止

めてどう接する事がいいのか、その手立てがわからないでいる。

T先生は、U君に対して、いつも何かしてあげなければと思うつゝ、どのように関わっていけばいいのかわからないというのが悩みであった。そういう時、U君を追っていた観察者から、U君にはU君の表現方法があり、又、遊びの中でも、U君なりの楽しみ方を持っているようだという指摘があった。

T先生は、その指摘を受け、「今まで、一方的に、自分の中にある園生活のすごさせ方をU君に押しつけようとして、U君



▲ 飛行機を作っているU君

の実態を見落していたように思う。教師会の中でも、"一人一人の子どもの違いを認めよう"と話し合っているが、実際の子どもとの触れ合いの中で、その子のその子らしさを、なかなか認められない事事が多かった。U君との出会いの中で、あらためて、考えさせられた」と話を結ばれた。

さて、次は、K君について、担任のN先生の報告を掲げよう。

### ■ K君のこと

これまで、"おはよう"と言えば、笑顔で "おはよう"と答えてくれる。"お部屋に入りましょ"と言えば、素直に入つてくれる。そのような子どもとの生活が多かった。そのような中に、K君が入園ってきて、出会いからびっくりさせられてしまった。K君は、私たちの思いどおりに反応してくれない子どもであった。K君が高い所に登れば、私たちはヒヤヒヤして無理に下に降そうとしてきた。そうした、K君との抵抗の多い生活の中で、"一人一人を見つめること"という事が、ことば上の事で、實際には見つめていなかつたのではないかと反省させられた。

そこで、まず、K君の気持ちに近づこうと、保育者の方からK

君に近づき、彼と一緒に楽しんでいこうという事になった。

やがて、K君は、友達や保育者とも遊ぶことができるようになつてきだ。二年目になって、K君とのかかわりも抵抗の少ないものになり、自然に受け入れられるようになつてきた。園の行事にも参加できるようになってきて、全てが良い状態になつてきだようだつた。その事は、K君が子ども集団の中で、目立たなくなつてきた事に通じる。そこからK君への見落しがでてきたのであるうか。

最近になって、一見、逆戻りに見えるような、K君の水を放出するという遊びがでてきた。以前にも、水で遊ぶという事があつ



▲ 水遊びをしているK君

たが、彼の気持ちに添おうという気持ちが強かつたので、"わあきいいな水ね" "すぐ遠くまでとんでいくよ" と言しながら、一緒に楽しんできた。

ところが、何でもできるようになつたいま、何でもわかるようになつてきたいま、K君の水遊びを、素直に受け入れられない気持ちが強くなつてきた。水不足が叫ばれているおり、"水は大事なんだからね" と、K君の気持ちに關係なく、自分の気持ちで規制する事しかしなかつた。

以前には、K君の水遊びと一緒に楽しむ事ができたのに、といふ気持ちもあり、教師会では、水ではなく他のものだつたら、私たちはどうしたであらう。水に替わる物は何だらうと話し合つてゐる。

担任のN先生は、以前、認める事のできたK君の水遊びを、K君が前よりも成長してきた事で、又、K君の"水遊び"が、勢いよく放出されることであり、『水』というものの価値を考えることで、強い抵抗を感じているようである。それは、N先生に限らず、A幼稚園の先生方、みんなの共通の気持であるようだ。

K君の水遊びについて、A幼稚園のM先生は、「津守先生が、

小さい頃、どんな遊びでも、母親の目の届かない所で、許され黙々と遊んでいたと言われた事が印象的です。

私も、子どもが、長い時間、自分のペースで、いろいろ遊びを遊んでもいいと思つています。

けれども、K君の水遊びはとても気になります。これが水でなかつたら、気にならないのですが、私たちの中で"水"というものがそうさせるのでしょうか。K君に対しても、おうちのかげで遊んでいる。あの自由さを認めてあげたいなという気がしているのですか……」と話された。

ここで、ゼミに参加された各幼稚園の先生でグループ討論が行なわれ、さまざまな意見や質問が出された。

まず、主な質問を取り上げてみよう。

○K君の水遊びで、先生方は何が困つたのか。

○まわりの子どもの反応はどうか。K君でなく他の子だつたらどうだつたか。

○K君が水で遊ぶとき、何が楽しいのだろうか。K君は水遊び以外、どんな遊びをしているのだろうか。

これらの質問を受けて、M先生は次のように答えられた。

「K君の水遊びに対して、何が困つたかと言えば、水を出して、

テラスをジャブジャブにする事が、素直に困った事です。

まわりの子ども達の反応は“自分もやりたい”と思う子がいたり、“ダメだよ”と注意する子もいます。又、一緒になって遊ぶ子もいて、その時は“まあ、しかたがない”と思っています。

K君は水遊び以外には、動くものが好きです。絵の具を混ぜることも好きで、遊びは割合、片寄らないで遊んでいます。私たちK君のことを、特別な子ではないという見方を必死にしているところです」

次に、主な意見を掲げると

○K君に対しても、先生方が持つてある氣配りが、他の子どもにも必要であることを、再認識させられた。

○K君は、のびのび動いているようと思える。やはり、一人一人の成長に即した考え方が必要ではないだろうか。

○子どもに基本的な事を教える時、大人の常識の上では、押さえ事が多くなってしまう。K君のように、身体で覚えるような子は、どのように身につけていけばいいのか考えなくてはいけない。

○K君が水を激しく出して逃げていく時、そこに至る、蓄積の過程があるのでないか。そこを見落しているのではないか。

○K君が水をビューンと放出しているのは、水を出しているのではなく、K君の何かの表出かもしないと考えられる。

これらの意見の中には、新たな視点も出てきており、改めて、どう関わるかという具体的な問題であるが、この問題を、大人と子どもとの出会いの基本にかかわる、共通の課題として、受けとめ、考えていく様である。

子ども達が、非常にうまく遊び込み始め、保育者もい感じになつて、いい気持で三学期を過している。その中で、保育者にとって、安心を妨げる子が出てくるという事は、いい感じの生活の中でも、その子との出会いがうまくつかめていないのではないかという反省が、保育者の中には絶えず起つてくるという証になるのかもしれない。

こういった、子どもと保育者の出会いに関わる課題というのが、自由でのびやかな保育の中で、不斷に問い合わせられる課題といふことになるのかもしれない。

# 保育の体験と思索

—子どもの世界の探究（三十）—

津 守 真

ある。

次に掲げるは、五歳児の二学期に、付属幼稚園で見られた遊びの断片である。このクラスでは、毎日がこういう活動の連続であると言つてよい。一見、他愛のない活動のようであるが、よく見ると五歳の二学期でなければ見られないものである。

滑り台に紐をかけて

五歳児の二学期になると、すでに半数の子どもは六歳になつてゐる。多くの子どもは幼稚園の生活に馴れ、自信をもち、遊ぶことがいよいよ面白くなる。よく見ていると、今までになかった成長の姿が見られる。子どもたちの世界は、時間的にも空間的にも、順序や構造ができる、おとなとの要請に対応して行動することも容易になる。それでいて子どもたちには独自の子どもの世界がある。

十月三日

五歳児の秋

滑り台の上で、男児と女児一人が上部の手すりに紐を結び、それにつかまって登ったりおりたりして遊んでいる。女の子たちは、他の男児にいじめられると、Kちゃんが守つてくれると言っている。Kは真剣な顔をして女の子と話している。ときどきいじめにくる男児たちがいるが、その子たちもふくめて皆楽しそうである。私はこの子たちが三歳だったときに、Kが女の子たちをいやがらせていたことを思い出す。

滑り台の上部の手すりに紐をかけてよじ登ったりおりたり滑りおりたりして遊ぶことは、子どもの発想によるもので、普通にはおとなはこういう遊びはしない。おとなが考へてはじめる遊びは、ままごととか、汽車ごととか、常識的なまごとまりのある活動であることが多い。また、滑り台は上から下に滑りおりる遊具という固定観念がおとなにはあって、紐をかけてよじ登るというようなことはなかなか考へない。ところが子どもはおうちごっこをしていても、一見おうちとは関係のないようなこういう遊びが途中にはさまって、それがおうちごっこを面白くさせているのである。その魅力に誘われて、他の子もやりたくなる。それがいじめにいくような形になるのだが、こうして集団がひろがり、五歳

児たちは、集団の遊びを楽しむ。こうした集団遊びは子どもたちによつてはじめられ、子どもたちの力によつて維持され、子どもたちによつて変形されてゆく。私は他の子たちと追いかけっこをしながら、滑り台の遊びを横目でみていたのであるが、自分たちの力で発展する遊びは本当に楽しそうに思えた。このKは三歳のときは、子どもの中とけこめないことが多く、女の子たちのままごとに入りたくても、投げたりひっくりかえしたりしていやがられることが多かつた。それを共通の遊びにつなぎとめるのには、保育者の側の努力を要することが多かつた。(七十六巻四号)当然のようなことであるけれども、いまや、子どもたちは自分たちの力で、集団の遊びを面白くしてゆくことができるようになつたのである。

Kの真剣な顔は、いかにKが子どもたちのつくり上げている世界の中に入りこんでいるかを示している。他人の眼は意識しない。自分たちの仲間の間の面白さの世界である。こういう集団の遊びは、五歳児の生活にいくらでも見出しができる。

### 庭の真中に出てゆく

女兒mが、ひとりで、バレーのように、床に腹ばいになる恰好をして、何度も床に倒れる。自分では何かのつもりらしいが、外から見ているとおかしくて、つい笑ってしまう。それでもひとりで何度も手をひろげて床に倒れる。私に向きもせずに、庭の真中に出てゆく。この子の心は何かの空想で一杯になっているのだろう。

mはしばしば白雪姫などになつたつむりになつて、他の人に、

「おばあさんになつて」など頼み、おはなしの筋に乗つて対話を

してよろこぶ。この日は、手をひろげてボーズをとり、地面に倒れることをひとりで何度も試みている。頭の中で何を空想しているのか分らないが、本気になって空想の世界に入っていることが察せられる。それを見ているとついおかしくて笑ってしまう。外からの目をいささかも気にする風はなく、そのものになりきつている姿は、外から見ても可愛らしくて好ましく思え、笑いを誘われる。mは五歳児にしては少し幼い方であるが、ひとりで堂堂と空想の世界に入つて行動しているところが、五歳児としての成長を感じさせる。mは手をひろげたボーズで地面に倒れることをくり返しながら、少しも悪びれることなく庭の真中に出てゆ

く。幼さを幼さのままに受けいれられてきた保育の成果がここに見られる。

## 順序

男児Nが、野球しようと私のところにくくる。私がボールを投げはじめると、忽ち十人くらい集まり、一列に並んでバッターの順番を待つ。一人一人真剣にバットを構えるので、ボールを投げるとき、楽しみな感じがする。私はほとんど一時間くらいボールを投げていた。

球を打ちたいと思えば、一列に並んで順番を待つていて、自分の番がくることをこの子どもたちは分つていて、進んで列をつくる。忽ち十人くらいの列ができる。一人一人の子どもの世界の中に、時間系列の順序ができており、それに支えられて集団の構造ができているといえよう。

同様に製作の過程にも、子どもの世界の順序性（秩序）を見ることができる。Yは折紙の本の蛙の作り方の図解を見て、「かえるのつくりかた教えて」と何度も言う。その折紙の本には、①から⑨までの段階が図解で示してある。少しやってみせると、じき

に⑤の段階までやれるようになり、鶴の作り方のようを開いて持つてくる。違つているところを少しやつてみせると、あとは自分でやると言つてとつてしまふ。⑦⑧も同様に、少しやつてやると

あとは自分でやると言つてとつてしまふ。⑨段階で出来上り、一つできると、もう一つ作ろうと言つて自分でやりはじめる。じつと指先を見つめながら、きちんとゆかないと何度もやり直し、こんどの方がよくできたと言つて見せにくる。折紙を折るという指

先の運動世界にも、はじめから終りまでの間に順序段階が成立しているのを見ることができる。

このように、子どもの世界に順序・構造ができてきていることは、この他にも、子どもの生活のいろいろの面に見ることができ。ることを、五歳児の二学期には組織化された集団活動や遊びを計画することが容易であることを理解することができるようと思う。おとなが段階づけた活動の計画に従つて活動することができるのである。五歳児の二学期には相当にあると言えよう。しかしそのような教師によつて構成された活動と子どもの遊びとは根本的に違う点がある。それは後者には子どもが自ら発動する力があるという点である。

### 白紙のノート

十月十七日

Uは白い画用紙を三つに折り、はさみで切り、ホチキスでとめ白いノートを作る。人が作ると次々に数人の子どもが同じような白いノートを作る。

Kは白い画用紙をはさみで切つてホチキスでとめ、白いノートを作つた。何冊も作つてそれを持ち歩いていた。白い紙を切り何もかかないで綴じてノートを作るというのは、このころの子どもが好んで作るものひとつである。おとなは、もつたいないから何かかいたらと言いがちなのであるが、これは白紙のノートであることに意味があるのでないかと思う。

丁度このころに、ある子どもたちは数枚にわたる続ぎものの描画をかいたり、それにおはなしをつけたりする。こういうことから考えると、何もかかない白紙を重ねてノートを作るとき、子どもの頭の中にはすでに、いろいろの構想が形にならないままに渦を巻いてあるのではなかろうか。白紙のノートは、続ぎものをか

きこんでゆくことのできる、いろいろの可能性をもつた空間である。白紙であるからこそどんなものでもかくことができる。

子どもの遊びの展開を見るときも、同様のことがある。遊びにおいて、次にどういう考えを出してゆくかは、子ども自身に委ねられている。どのような理由であれ、それがきめられていたら、

遊びではなくなってしまう。未来は子どもにとっては何もかれていらない白紙のようなものである。現在において、そのような未来をもつことができるとき、子ども自身の内側からイメージが湧き起つてくるであろう。それが次の瞬間の遊びをつくる。

白紙のノートを作つて持ち歩いている子どもの姿を見ると、さまざまな可能性をもつ未来が察せられて、何か豊かな気持になる。そこにはいつか、思いもかけない物語りが描かれてゆくである。それは時が来て、子ども自身が作り出してゆくものである。

「人間で動物なんだよ」という子どもの設問にはじまり、動物にはしつぽがあるが人間にはしつぽがない、故に人間は動物ではないという言語面の三段論法による結論を導びき出している。その結論は最初の設問と異なっていて、子どもたちは何か腑に落ちない様子であるが、まだそれ以上の議論にはならない。

動物をしつぽによつて定義しているが、子どもはだれもそれに異論を唱えない。子どもはしつぽには早くから大きな関心を持つており、布で作ったしつぽをお尻につけてやると、子どもは急に話をする。

## 十一月二十三日

### 矛盾

男児S 「人間で動物なんだよ」

男児H 「ほんと?」

動物ならしつぽがあるという話になる。

「豚にはしつぽがあつたかなあ?」

「ねこはしつぽがあるよ」

「うちの猫はしつぽがないよ」

「短いのはあるんじゃない?」

「ゴリラはしつぽがないよ」

「ゴリラと人間だけしつぽがないんだ」

話しているうちに人間は動物ではないということになる。

動物のような原始的なしぐさをして遊びはじめる。後に長くひき

するしつばは原始性への通路のようである。そして、しつばをお尻につけてもらうことを喜ぶ。しつばをとるとまた人間の動作にもどる。人間は動物であるという設問に始まるがそれと矛盾した結論になり、どちらが本当か、腑に落ちないまま子どもたちは散る。

### 五歳児の栄光と憂うつ

五歳児にはいろいろの点で成長の姿がみられる。子ども同士で考え方を相互に調節することができるし、遊びも組織化してくる。また、おとなとの要請にこたえてゆくことができるので、おとなが計画した組織立った活動を子どもにやらせることが容易になる。

このことが、教師にとつては、日日の子どもとの生活を惰性化させ、子どもにとっては、華やかであるはずの活動から不満の原因が作り出される。

次に掲げるのは、五歳児一学期の家庭での記録である。

メタルを足の下に踏みつける

十一月八日

Pはこのじろ幼稚園から帰ると、きげんの悪いことが多い。小さなことですぐにギヤーとなぐ。幼稚園から、毎日、リボンの先に、牛乳びんのふたに模様をかいだメタルを首に下げて帰るが、家に帰るとすぐに、時には帰宅の途上でそれを地面に捨て足で踏みつけてしまう。話をきくと、この数週間、幼稚園ではオリソーピックじっこをしている。「オリソーピックじっこなんかつまらない」と言う。他のことして遊んだらといふと、「ほかにやることないもん」「おままで」となんておもしろくない」「幼稚園なんてつまんない、あたしがやろうと思ってるとおかだづけになる」「それにさ、ほかにはあたしのすることがないんだもん」「幼稚園じゃ、ちよっとでも土を掘ると叱られちゃうの」など話す。

幼稚園では、何週間にもわたって、オリソーピックじっここの单元活動が行なわれている。何種目にもわたる運動が用意されていて子どもたちは列を作つて順番を待ち、一覧表に○や×をつけ、どの子どもも毎日その表をうめてゆかなければならぬらしい。幼稚園では单元活動は順調に行なわれているのだろうが、家に帰つてからの子どもの様子をみると、幼稚園で満足していないことは明らかである。先生は恐らくそのことに気付いていないのだろう

と思われる。このことの三日前に、幼稚園の先生からの報告に、「このふたどもいい子になったことに驚きます。片づけを率先してどんどんする、並ぶときにも先に立てて並びます」とある。子どもは先生の期待に添うことができるようになったので、先生が計画したことからはずれることができず、無理をしているのだろうと思われる。また、先生はいい子になった側面だけを見て、子どもが自分からはじめた、いたずらのように見える小さな遊びの価値を見落しているのではないかと思う。計画された活動の側から言えば栄光のしるしとも云えるメタルを、子どもは投げ捨てて足の下にふみつける。足の下にふみつけるものは、その人にとって何の価値も認められないものであろう。運動会やも学芸会でも、単元活動でも、先生の側からは栄光と見えるとのまことにそのことが、子どもにとっては憂うつのものとなるのである。

おとながある計画をもったとき、その熱意に触発されて、子どもも何かをやりはじめる事は多く見られる。そのうちに、子どもは自分から別の面白さを見出して、おとの考え方とは違うことをやりはじめる事も多く見るところである。そのときに、おとなが自分の考え方を押しすする事に教育的価値を見出すと、子どもは十分な活動ができなくなってしまう。つまり、おとなが張り切りすぎてはいけないのである。子ども自身の考えが生れるだけのみとりがそこになければならない。おとなにも子どもにも、白紙のノートのような空白の瞬間がなければならない。そして子どもが本気になって取り組む活動は、むしろこれからの後の部分にある。おとなにも子どもにも満足のいくような保育は、ここまで到達できたときであるが、それは大げさなことではなくて、だれでもが身近に体験していると思う。ある段階で思い切って自分の考えを捨てて子どもと一緒にダンボールの箱の中に入つて過ごしたとき、いつの間にか子どもは自分の遊びをはじめている、その一日の終りに、「きょうは本当に面白かったね」とため息とともに発することばをきくことのできたとき、子どもと半日を共にした保育のよろこびを感じるのである。

学校に上る時を間近に控えた五歳児の秋であるが、この時期は学校への準備のためにあるのではない。幼稚園生活の中でも最も充実した生活をすることのできる時期である。どの子どもも、それぞれ、最も自分らしさを發揮しながら、共通の遊びを作り上げることのできる時期である。

(つづく)

—— 63 ——

新  
し  
み

新しきは外になく内にある。物になく心にある。年々歳々同じ日の光に、きょうは初日の新しさがある。きのうも汲んだ井戸の水に、けさ若水の新しさがある。

る時を持ちたいと思う。

私どもの祖先たちは、時間を、暦とい

一月号 ◎ 定価二五〇円

昭和五十四年十二月二十五日 印刷  
昭和三十二年二月一日 編行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ二

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発締行人兼  
津守真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

発行所 日本幼稚園協会

印刷所  
図書印刷株式会社

10 東京都千代田区神田小川町三之一  
尾壳新　株式会社 フジコベ

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御講読についての御注文は発売

所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がござがましたら、おとりかえいたします。

# 新学期用品

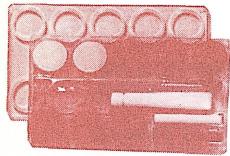
新製品を豊富に

取揃えました。



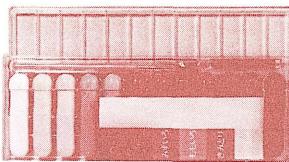
●すいさいあそび 350円

B4判 水彩画に適した画用紙  
カード式 作品を展示できるタトウ入り。  
幼児が水彩絵具に、自然と慣れていくよう配慮された水彩画の導入として最適な教材です。



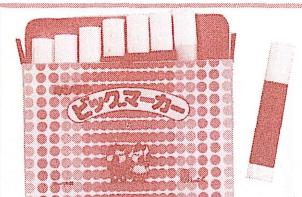
●まんてんカラー

8色 550円 12色 670円



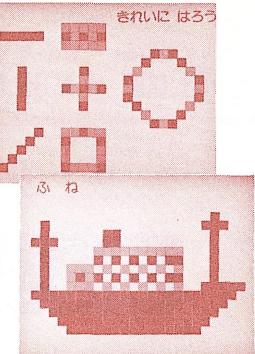
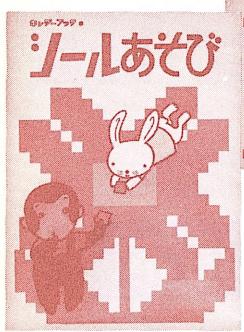
●すいさいえのぐ

8色 700円 12色 1,000円



●キンダービッグマーカー

8色 2,800円



●シールあそび 350円

A4変型判 画用紙10丁 1色刷  
シール16枚(オレンジ・赤・水・黄緑・各色4枚)袋入  
モザイク(タイル)画の導入用として、開発されました。

●壁面セット 1,600円

36cm×25.5cm アート紙+発泡体+粘着テープ  
赤・青・黄・緑・黒・白・桃・黄緑・茶・橙の  
10色。  
モザイク画が容易につくれる、共同制作用教材  
です。

卒園記念品にどうぞ

## フレーベル館が贈る 世界の特選遊具

M100 にわとり ¥97,000(1台)



### デンマークのコンパン遊具



美的環境を創造し、新しい「遊び」の世界へ  
誘うデンマーク生まれの「コンパン」遊具。

子どもと環境の美しい調和を求める。

- あらゆる安全への配慮が、なされています。
- やさしく美しい、新しいデザインです。
- 品質が良く、耐久性に優れています。

写真のM100「にわとり」ほか

価格 ¥97,000～¥86,500.

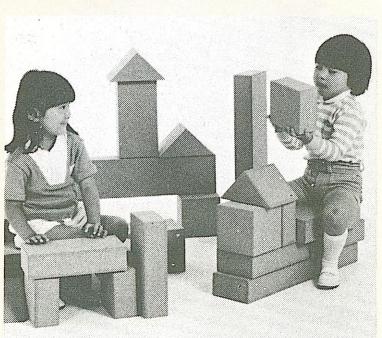


新しい創造性を育てる西ドイツ生まれの大型ブロック



- 丈夫で強く、アームには鉄芯が入っていて、  
折れることはありません。
- 落ちついた味わいのある色あいです。

Aセット〔695個〕 Bセット〔440個〕 Cセット〔255個〕  
¥130,000.    ¥85,000.    ¥50,000.



軽くてソフトな手ざわり  
年少児のために開発された積木です。

### コルク積木

- コルクの材質を生かした積木です。
- 軽くて、感触がよく、乳幼児用として最適です。
- 小型箱積木と、組み合せて遊べます。

発泡材の上をコルク材  
でくるんであります。 1セット(24個) ¥39,000.

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館